個性『ショック吸収』を得た私がすべきこと

万望

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ジャングルジムから落下した衝撃で原作知識と、ついでに自我を得た主人公。下手すると自分が脳無の素材にされるかもしれないことを理解し、その未来を回避することを目標に動き出す。

目次

火守　橋華：　幼年期
火守　橋華：　Ｏｒｉｇｉｎ　1
強くあれ　7
個性検査　13
考察　23
出会い　28
合気　36
師匠　48
志望　57
出会い　67
ヒーロー　78
継承者　89

火守　橋華：　幼年期
火守　橋華：　Ｏｒｉｇｉｎ

さて。

漫画「僕のヒーローアカデミア」において、主人公たちと敵対する明確な敵（ヴィラン）が初めて出現したＵＳＪ事件。そこで登場した敵（ヴィラン）の中で、最も絶望的な存在といえば何だっただろうか。

脳無である。

ＵＳＪ事件において登場した脳無は、「ハイエンド」と呼ばれる１２体の傑作のうちの一体である。殻木により与えられたと思われる圧倒的な身体能力により『個性』を抹消された状態でも相澤先生に重傷を負わせ、オールマイトと渡り合うことも可能にした。加えて『超再生』により半身を破壊されても容易に修復することから、生半可な攻撃は意味をなさない。

そして何より。個性『ショック吸収』。瞬間的な衝撃を吸収することで高い防御力を

有し、その性能にはオールマイトの打撃すらも通用せず最終的に彼の３００発以上の全力の拳により吸収限界を迎えることで撃破された。

十数人の雑魚敵を圧倒する相澤先生を凄まじい身体能力で撃破。また個性『抹消』でその身体能力が失われなかったことからそれが生身によることが判明。満を辞して登場したオールマイトの打撃すら無効化。そして轟により氷結、無効化されたかと思いきや体を砕くことで復活と、なかなかに絶望ポイントが多い脳無。しかし、誰もが一度はこう考えたことがあるのではないだろうか。

『ショック吸収』、強くね？と。

この『個性』は、ＡＦＯあるいは殻木によって与えられたものであるが、移植された『個性』は素の状態、言い換えると経験値が溜まっていないのだ。鍛えた『個性』を奪ったとしてもその伸び代は奪えないという事実は、ベストジーニストと相対した時のＡＦＯの発言から判明したものである。

ひょっとすると筋肉量によって吸収可能な威力が変化するなどの条件があるのかもしれないが、それにしたって強すぎる『個性』という他はない。

ではこの強『個性』、どこで手に入れたものだろうか。ヒーローが活躍する時代においてこの『個性』は極めて戦闘向きという他ないことから、もし所有者が大人であった場合それはヒーローであった可能性が極めて高くその捕獲は容易ではなかったことだろ

う。つまり、この『個性』の持ち主は子供の時に奪われた可能性が高い。殻木が個性収集のために運営している病院や児童養護施設があることを考えると、これは容易いことだっただろう。

そして『個性』を失った子供がどうなったかを考えると……およそ碌なことになっていないだろう。死体をでっち上げるなどして、実験材料に使われていたのかもしれない。

と、なぜこのようなことをつらつらと述べているのかといえば。

私、火守（ひもり）橋華（きょうか）（3歳）は。「僕のヒーローアカデミア」という作品についての知識を持ち、そしておそらくその世界に存在する人間だからである。加えて、『ダメージ吸収』というべき個性を有した。

こうなった経緯はといえば。数日前、まだ何も恐れるものを知らない幼児であった私は母親の目を盗みジャングルジムをよじ登った。それはもう海兵隊の訓練の如き勢いで手をかけ足をかけ、あっという間に頂上にたどり着いた。そして開放感のあまり、「ばんざーい！」と叫んだのである。ジェスチャーつきで。そして当然の如く足を滑らせ、後頭部から真っ逆さまに落ちた。そして地面に衝突した瞬間、後頭部からエネルギーの

奔流が脳髄全体に迸ったのだ。

すると脳細胞が妙にシナプスした結果か、どこからか受信した「原作知識」とでも言うべき知識とそれを十全に扱うに足る知性がこの小さな頭脳に宿った。そして慌てて駆けつけてきた母親に病院に連れて行かれるも、当然のように無傷。「よほどうまい具合に着地できたんでしょうねぇ」と医師は言うが、そう言うしかないのだろう。いくら子供の肉体が柔らかいといっても衝撃を受け流すことなどできるわけがなかろうに。

帰宅後、大分過保護になった母の目を盗みつつ実験することで、私の『個性』についてある程度把握することができた。

まず、私の『個性』はあの事故からも分かったように瞬間的な衝撃を吸収するものであり、その限界はまだ見えていない。というか3歳児の手に届く範囲に私の吸収能力を超える衝撃を与えられるものなどあったらそれこそ問題なので、当然のことなのだが。

次に物理的な衝撃だけでなく熱に対しても耐性を有する、あるいは有するであろうということ。これは元プロヒーローである私の母の『個性』から推察したものである。まだ実験できてはいないが、機会があれば試してみたいものだ。

そして、力の流れが感覚的に理解できる。これは衝撃を無効化するのでなく吸収するという『個性』の別の側面というべきか。ジャングルジムから落ちた時、エネルギーが後頭部から頭部全体に広がるのが理解できたように、受けた力がどこから始まり、どの

ように流れ、どこに辿り着くかがわかるのだ。

強い『個性』だ。間違い無くそう言えるはずだ。きっと手放しで喜べたことだろう。……転落した時に運ばれた病院が蛇腔総合病院でなければ。主人公、緑谷出久が個性診断を行い、「ドクター」がいた　あの蛇腔総合病院でなければ。早急に対策を行わなかった場合、おそらく4歳時に行われる個性診断で目をつけられてしまう。

目をつけられたものの末路は、およそ前述した通りのものだろう。……まったく、冗談じゃない。いくら超越者から見れば取るに足りない人間とて、野菜でもあるまいに自我があり、未来があり、希望がある。それを収穫する様に奪われるのはごめんだ。とくに当事者の立場では。だが、希望はある。

彼らにとって魅力的な『個性』とは、『超再生』のように鍛えずとも強い能力を発揮するものだ。ならば、私の『個性』を「強いかもしれないが、特定の条件を満たさなければ真価を発揮できない」ものと誤認させることができれば良い。そうだ、例えば『受け流し』とかはどうだろうか。ジャングルジムから落ちた時は無意識に最善の行動を取れただけで、通常は力を受けてから自分にダメージが来ないように流すための技量が必要な『個性』という設定だ。

ならば、来たる日に向けて備えよう。武術なんかを習えば説得力が増すだろうし、

その先にもきっと役立つはずだ。

最悪の敵に目をつけられることは避けたいけれども、知ってしまったのだ。彼ら（主人公達）の戦いを、その意志を。できることならその姿を間近で見たいと思ってしまうのはしょうがないことじゃないか。

というわけで、中期目標として「ドクターに『個性』を誤解させ、かつ鍛えればヒーローになる可能性を秘めているとも思わせる」こと、長期目標として「雄英高校ヒーロー科への合格」を設定しよう。

私がヒーローになるための道は、高潔な決意などほとんどなしに「襲われたくないから」「見てみたいから」という幼稚極まりない理由でこうして始まった。

強くあれ

私の二つの目標を達成するために必要なこと、つまりなんらかの武術を習得したいという願いは案外簡単に叶った。どちらかといえば今までの私は家で遊ぶことを好む子供だったし、またつい先日の落下事件もあって母は「痛いこともあるかもしれないけれど大丈夫？」と心配していた。しかし、あんなことにならないようにちゃんと体を動かしたいし、ヒーローにもなってみたいからだと言うと、しばらく迷ってから頷いてくれた。……少し目が潤んでいるのはなぜだろうか？

実はこの世界、驚くほどに武術の需要が大きい。まあそれは当然か。『個性』持ちの凶悪な敵（ヴィラン）から逃れるために『個性』があろうとなかろうと、自衛の手段を得る必要があるのだから。

嬉しいことにーーーそれともそうならざるを得ないほど犯罪発生率が高いこの社会を問題視すべきか、そのおかげで各武術の練度は非常に高いらしい。ヒーローが自分の『個性』と既存の武術を組み合わせて独自の流派を作り、似た『個性』持ちの子供がそこに入門するなんてこともあるようだから。

そんな武術雨後の筍状態で何を習得するべきか考えた結果、空手と合気道に決まった。前者は強靭な体幹の育成と、手指という弱点さえ傷つくことがないであろう私に向いたスタイルだと思ったから。後者は『受け流し』をでっち上げるために必要な振る舞いを学ぶため。幸運なことに二つとも近場にあったので、雰囲気が悪くなければ行こうかという話になった。

私が師事した道場は、どちらも元プロヒーローが教えてくれるところだった。少し調べたところ、こうした道場は一部の歴史あるところを除いて大体が元プロヒーローが指導員になっているらしい。まあ実戦経験もあるし、それだけ「強い」ことのわかりやすい証明になるのだから当然か。

いきなり実戦形式でできるのかなとワクワクしていたら、受け身の練習や型の反復などひたすら地味なことの繰り返しだった。当たり前か。武術は型を染み込ませた結果、脳死でも最善手を最速で打てるようになることを目的にしているのだ。素人がいきなり殴り合いなんてしたらそれこそ危ない。仕方ないので家で母に見てもらいながら型を練習することにした。元ヒーロー、それも増強系でなかっただけあってしっかり修めているらしい。アドバイスにはなるほどと思うものもあり、とても参考になった。

そして入門して6ヶ月経った現在の私の評価は、「才能があるかは分からないが体の動かし方がとてもしっかりしている」「合気の天賦の才がある」というものだった。

当然だろう。私の知性はあれ以来並みの3歳児を凌駕しているので、体の操作に慣れることを優先した後型の動作を行うなど容易いことなのだ。他の同年代がそれをできない中私だけできることは地味に大きなアドバンテージではなかろうか。

そして合気道は言うまでもない。自分に働く力を第六感的に知覚できるのだから、それを相手に押し付けるのもまた可能である。真面目に鍛錬を積んでいけば、漫画のようなことも技術だけでできるようになる気すらしている。まあここが漫画世界なのでだからなんだと言う感じだろうが。

『個性』の訓練は進んでいるといえば進んでいるし、そうでないといえばそうでない。なにせ、この『個性』の上限をまだ測ることができないのだから。

とりあえず壁に向かって突きや蹴りをーーーーろくに末端を強くする鍛錬をしていないならどこか怪我してもおかしくはないーーー放っているが、全くダメージを負わない。人体の弱い部分に指を突き込んだり引っ掛けたりする方ではない貫手をなんとなくでやってみたが、それすらもなんの問題にならない。一本指貫手はなんか必殺技になりそうなのでこれからも練習していきたいが。

一方で『個性』の制御は少し進んだ。具体的には、吸収した衝撃の流れをほんの少し

変えられる。……だからなんだという意見もあるかもしれないが、努力の積み重ねによって化けるのではないかと考えている。最終目標は衝撃を受けた瞬間返すアレだ。まあ気楽に行こう。

私の『個性』を受け流しだと言い張るには十分な技量が（あくまでも3歳児にしてはであるが）今の段階で備わっていると思うが、どちらも辞める気はない。少しずつ、たまに停滞はあっても自分の技が洗練されていくのを感じるのはなんとも心地いいものなのだ。ライフワークになりそうな気がする。

それから個性診断までの三ヶ月は、あっという間だった。技を磨き、『個性』の練度を高め、母との時間を過ごす。正直それくらいしかすることがないのだ。……この生活に父という存在がないことは疑問に思っていたが、今はその訳を理解している。元プロヒーローの母、私に受け継がれた『個性』のヒーロー適性の高さ、そしてたまに語ってくれる思い出話に出てくる頼もしい相棒（パートナー）。これだけ揃えば、いくらなんでも察せられる。まあ今は聞く必要がないし、むしろ聞かないでおくべきだと思っている。できることといえば、母に目一杯甘えることだろう。辛い経験は薄まることはないが、同時に幸福によって塗り潰すことは可能なのだ。

「ねえおかあさん」
「なあに、どうしたの？」
「おかあさんってひーろーさんだったの？」
「ふふ、そうよ。今はもうただのお母さんだけど」
「えー、うそだあ！」
「どうして？」
「だっておかあさん、かっこいいもん！」
　この思いは本当だ。いくら公務員扱いのヒーローとはいえ、殉職率もそれなりなので報償金も決して高いとはいえない額だ。それでも子供に当たらず、苦しい顔を見せず、私の幸せを願っている立派な人なのだ。これを尊いと思わずにいられるだろうか。
　すると母はしばらく私の顔をまじまじと見て、ポロリと涙をこぼした。
「おかあさん？なんでないてるの？」
「えっ、ああっ、ごめんね？ちょっと目にゴミが入っちゃって。でも……そっか、お母さんかっこいいか」
「うん！」
　少なくとも私は、この母の下に生まれてよかった、と思っているのだ。だから……まあ、辛い思いをして欲しくない。

そう。例えば。

《子供が持つ『個性』が巨悪の信奉者に目をつけられて、その命ごと奪われるとか。》

本番は明日だ。

個性検査

4月2日。

この日は、子供たちにとって重要なイベントがある日だ。

そう、個性検査。国によって実施することを義務付けられており、多くの『個性』が3～4歳で発現することから満4歳になるタイミングで地域の総合病院で一斉検査が行われるのが一般的だ。特にここ、蛇腔総合病院は大規模であることから今日だけは子供で溢れかえるのだ。

ある個人が『個性』を有するか否かは、個性黎明期ならばともかく現在では医学的な検査によって診断が可能である。それは例えば採血による個性因子の識別であり、あるいは小趾の関節の有無という解剖学的観点からの判断でもある。5分もあれば診断が可能なので、ほとんどの場合採血で診断するが。

そして『個性』があると分かった子供たちは例外なく大はしゃぎする。なにせテレビで見た、あるいは握手してもらった、ひょっとすると助けてもらったあのヒーローたちの仲間入りができるかもしれないのだから。無論この一億総個性社会、その門は決して

広くはないが。

無個性と診断された子は可哀想だ。そうした道は閉ざされ、辿り着いても「敵（ヴィラン）受け取り係」と揶揄される警察官なのだから。あれも少なくとも自分にはできない立派な職業だと思うけれども。そう考えて、午前中に院長が診た子のことを思い出した。あの子確か無個性じゃなかったっけ。ちらっと見たが、オールマイトのフィギュアを持っていた。ありゃあヒーロー志望だったんだろうな。……まあ人助けをしたいなら色々な道があるし、そう気を落とさないで欲しいと思うのは大人のエゴだろうか。

「次の方、どうぞー。」

っと、いけない。今は仕事中だ。一応人数のノルマはあるんだから、早く進めてかないと。

「今日はよろしくお願いします。」

「おねがいします！」

はーっ、えらく綺麗な人だなぁ。髪も透明感のある赤色っていうか凄く艶めかしい……え☒

「あ、あの！もしかして！「ヒイロ」さんですか!?」

思わず立ち上がってしまった。忘れるわけはない、数年前火災に巻き込まれてもうダ

メかと思った時現れたあの人だ！

「ええと、ひょっとしてファンの方でした？」

「あ、いえ、実は昔、あなたに助けてもらったことがあって……覚えていらっしゃらないかもしれないですけど」

「すみません、でもそう言っていただけて嬉しいです。今はただの母親ですから」

そうか、結婚してたのか……。全く見なくなったからどうしたんだろうとは思ってたけど。

「いえ、私にとっては貴女が最高のヒーローです。……すみません、いきなり話し込んでしまって。えー、そちらがお子さんですね？」

ヒイロさん譲りの髪色に、褐色の肌。これは父親から受け継いだんだろうか。

「はい、『個性』はもう発現しているようなんですが」

「なるほど、わかりました。それに関しては検査中に伺いたいと思います。」

子供に注射針という組み合わせはまあ相性が悪い。なので片手にぬいぐるみを持ちつつ採血の準備を進める。

「ごめんね、おうでがちょっとだけぎゅーっとするけど大丈夫かな？」

そう言ってく駆血帯を巻くが……ずいぶんおとなしい。泣き虫の子ならもうここら辺で察して暴れ出すのだが。さすがヒーローの子、ということか。

結局、採血そのものもあっけなく終わった。針を挿れた時も顔を顰めただけで、凄く楽だった。他の子も同じくらいスムーズになったらいいのに、と思うくらい。そしてすぐに検査結果が出た。結果はーーー個性因子あり。

「ええと、ですね。個性学の分野はあまり詳しくないのですが、両親の『個性』と子の『個性』にはある程度の相関があるのはご存知ですね？なので、この子ーーー橋華ちゃんの個性届けを記入する際に火守さん達の個性を伺えればと思います。もしよろしければ概要だけでもお話いただけませんか？」

……なるほど、火守さんが火を吸収する『個性』、その夫が体の強度を変える『個性』か。変化が外見に現れるタイプではなさそうだしこれはちょっと予想がつかない。なにか生活上で心当たりはないだろうか。

「『個性』というのは使用者本人が一番理解しているのですが、流石にこの年齢では本人による説明は難しいと思います。『個性』の予兆、なにか変わったことはありませんでしたか？」

水を生むような『個性』なら床をびしょびしょに濡らしていたり、ホークスの『剛翼』のような『個性』なら羽が散らばっていたり、そうした「お漏らし」はコントロールができない幼少期には必ずあるはずだ。そう聞いてみると、

「そう……ですね……あっ！」

というので続きを促す。

「お恥ずかしい話なんですが、訳あってこの子は私だけで育てているんです。それで去年の6月くらいでしょうか、うっかりこの子から目を離した時ジャングルジムの頂上から落ちてしまって。慌ててこの病院に連れてきたんですが、どこも怪我をしていないと言われたんです。もしかしたら『個性』が原因かもしれません。」

なるほど、ダメージを抑えるような『個性』か。その可能性はあるな。

でもその前に。

「火守さん、お子さんから目を離さないであげてください。この子は凄く賢いようですが、まだ子供なんです。それが難しいなら、どうか周りを頼ってください。お願いします。私のヒーローが子供に怪我をさせるなんて嫌です！」

……感情に任せてかなり余計なことを言ってしまった。他人の事情も知らず勝手に口を挟むなんて一番してはいけないことなのに。でも、私を助けてくれた人も、その子供も傷つくのはごめんだ。

すると彼女は、落ち着いた目で私を見ていった。

「すみません。ありがとうございます。あの頃は本当に余裕がなくて……。でも、もう

あの子を、私から離れるまで守ると決めましたから。」

……なるほど、これがヒーロー（守る者）か。やっぱり私には向いてない。気恥ずかしくなって、今度は橋華ちゃんに語りかける。

「きょうかちゃん、いままで、なにか「つかうぞー！」っておもったこと、あるかな？」

「ある！」

『個性』を使う感覚は身に付けているということだろうか。

「じゃあ、おねえさんにつかうところみせてもらうことってできるかな？」

「いいよ！」

聞き分けが良すぎて助かる。そう思っていると、椅子からぱっと立ち上がって演武のようなことをし始めた。

「これ！」

……どれだろうか。

私の戸惑いに気づいたのか、橋華ちゃんが言った。

「あのねー、てをね、こっちにやって？」

接触系の個性だろうか。少し疑問に思いながら手をのばし、その腕に触れた瞬間。

「あれ？」

思わず声を出した。真っ直ぐ出したはずの手が、橋華ちゃんにより逸らされている。何より驚くべきは、それに一切気づけなかったことだ。慌てて言う。

「もう一回いいかな？」

「いいよ！」

今度は変化を見逃さないよう、注意して行う。すると。

今度も逸らされた。

でも、違う。気づくこともできなかった1度目と違って、今回はどちらかというと技術によるものだと言う感覚を覚える。現に、

「しっぱいしちゃった……」

と橋華ちゃんがしょんぼりしているのだから。

大丈夫、よくあることだよと言いながら今回の結果から考えると。この『個性』は、おそらく『受け流し』とでも言うべきものだろう。高所から落ちた時に偶発的に発動。そして意識的に使うことは難しく、なんらかの技と組み合わせると真価を発揮するタイプか。

頭の中でまとめ終わったところで、火守さんに語る。

「恐らく『個性』はアクティブ型、『受け流し』とでも言うべきものでしょう。訓練を積

めばヒーローになることも可能な、いい『個性』だと思います。」
「良かった！この子がどんな『個性』だろうと応援しようと思ってたんですが……ふふっ、それなら雄英も夢じゃないかもしれないですね。」
雄英って、あの雄英だろうか。なんとも大きく出たものだ。でも……この子なら、なんとなく行ける気がする。
「では、こちらで個性届けの提出は行なっておきます。後でこちらの書類にサインをお願いしますね。あと……」
橋華ちゃんの前にしゃがみ込み、目線を合わせる。目を逸らすこともなくこちらをじっと見てくるので、逆に恥ずかしいくらいだ。
「きょうかちゃんは、ひーろーになりたい？」
すると、迷いのない返事が返ってきた。
「おかあさんみたいに、かっこよくなる！」と。
なるほど、じゃあ未来のヒーローにご褒美をあげないと。普段は注射が終わった時にあげるんだけど、渡しそびれたし。
私の『個性』を発動。背中からふわりと生えた翼を、常備している割り箸でくるくるっとまとめて完成だ。
「はい、どうぞ。未来のヒーローさん？」

こちらを驚いた顔で見つめ、そしてパッと笑い、言った。
「ありがとう！」

全ての業務が終わり、ぐっと伸びをして診察室を出る。個性検査の日は本当に大変だ。……でも、今日は思いがけない出会いがあったから良かったかな？
そう考えながら歩いていると、向こうに小柄な影が見えた。
「お疲れ様です！院長」
立ち止まって挨拶すると、返事が返ってきた。
「お疲れ様。今日は大変だったね？」
殻木院長はとても気さくな人で、世間のイメージのような驕った印象はない。むしろいくつも病院や児童養護施設を運営している、尊敬すべき人だ。
「流石に疲れますね。……でも、今日はいいことがありました！昔助けてくれたヒーローの方に会えたんですよ！」
そう言うと、歯車のような眼鏡から覗く目が一瞬鋭くなった気がした。気のせいかな？と思っていると、興味を持ったようだった。
「プロヒーローのか。とすると、『個性』もさぞ優れているんじゃないかい？」

優れているとは言い切れないが、間違いなく伸びる。そう確信を持って答える。
「ええ、今はまだ強いとは言えないですがきっといいヒーローになれると思います。」
すると、そうかそうかと頷いて院長が言う。
「ゆっくり育っていってほしいものだね。……強い『個性』が生まれるのは、希望になるからね。」
「なりますよ、この社会の希望に。」
私の『個性』ではヒーローはやれないが、その芽は育っているのだ。大きく咲いて欲しい、と思いながら院長に別れの挨拶をした。

「見つからんものだなァ、良い『個性』は。プロヒーローからプロヒーローが生まれるわけでもない訳か。」

考察

勝った。勝った。賭けに勝った。医師の女の人からもらった綿飴をもしゃもしゃ食べながら、私はそう確信していた。個性を発動してみて、と言われて一度成功し、もう一度すると失敗したことで「条件付きで発揮される個性、失敗することもある」と印象づけられた。これで恐れるものは何もない。

とりあえず高校生になるまではなんの問題もなくなる。なぜ分かるかって？昼前に整理券を母と取りに行った時、たまたま出くわしたのだ。諦めきった顔をした、ワカメ頭の幼児に。これで彼と私は同学年ということが確定した。従ってこの先大きな事件は起きず、ひたすら訓練しておけばいいのだ。

そう思うと、思わずにやにやしてしまう。どうやら予想以上に、巨悪（AFO）に目をつけられるかもしれないという不安感は大きかったようだ。

それにしても、『個性』を成長させるための訓練法が全く思いつかない。今日の採血で私の皮膚が貫通されたところに突破口はありそうだが、具体的な方法が分からん。合宿の個性成長訓練は校長発案のものだっただろうか。ちょっとでいいからハイスペック

さを分けて欲しいものだと思ってしまう。自分の年齢もあって取れる手段があまりに少なく、知識以外は優れていない私ではどうしようもないのだ。
……ひょっとすると、ある程度の年齢になるまで身動きがとれないパターンじゃないか？　これは。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

本当に年単位でかかった。全く、冗談じゃないぞ。だが収穫は大きい。時間をかけたお陰で私の『個性』の本質を捉えることができた。
ずっと、『ダメージ吸収』が私の『個性』だと思っていた。しかし、それでは説明がつかないことが二つあった。一つ、吸収したダメージはどこに行っているのか。二つ、なぜ力の流れなんて感じることができるのか。
ダメージを吸収するのは、概念的な怪我を無効にしたり自身を傷つけうるモノの影響を受けないようにしたりする類の力ではない。それは4歳のときの採血で針が刺さったことから明らかだ。つまり吸収したダメージ、言い換えればエネルギーが私の中に蓄積しているはず。

そして力の流れに対する第六感はいうまでもない。単純なダメージ吸収という『個性』ならば、そんな感覚は付随する筈がない。『個性』は後付けの特殊能力ではなく身体能力の延長なのだから、感覚があることと『個性』の根源には繋がりがあるのが当然だ。

きっかけは個性検査以降、行き詰まりすぎて2年もの間足踏みを続けていたこと。『個性』の許容限界の向上は見込めない、しかし空手や合気だけは順調に習得していくというギャップから「やっぱり身体能力は鍛えられても特殊な力なんて早々鍛えられるもんでもないな」と思ってしまった。そのことを母に愚痴ると、

「『個性』も体の一部なんだから、橋華の成長に合わせて育っていくの。だから、焦らなくていいのよ？」

と言われたのだ。

目から鱗だった。この世界ではそれは当然のことだが、なまじ知識があるだけに間違った視点から見てしまっていた。

それに気づかされてからは、徹底的に検証を行なった。重い一撃と軽い連撃、限りなく素早く衝撃を与えることとじっくり圧力をかけていく時の差。皮膚の薄皮一枚を擦るように衝撃を与えたらどうなるか。回転を入れた場合に変化はあるか、など。

結果、私の『ダメージ吸収』の攻略法が判明した。ゆっくり力をかけ続けた場合、ダ

メージ吸収は作用せず組織の破壊、つまり青アザが生じる。試したことはないが、例えば総重量数百キロの物体を私に乗せ、ジワジワと組織を圧壊させられれば私は死ぬということだ。パンチ力1トンの人に殴られたとしてもかすり傷すら負わないだろうという確信を持っているので、これは不思議だったが。

このことから結論づけた私の『個性』の本質が、エネルギー変換だ。ある単位時間あたりに体細胞が破壊されるような圧力を与えられた場合そのエネルギーを吸収、細胞分子の結合を強化するのに利用する。それにより肉体は瞬間的な衝撃に強い耐性を持つ。

こう仮定すれば、力の流れが理解できることも吸収したエネルギーを意識的に分配するために必要な機能だと言える。

聞いてみると、母もヒーロー時代は熱を吸収してどこを強化するかを考えながら動いていたそうなのでこの説は正しいのだろう。

……というか遠慮せずにもっと積極的に母のヒーロー時代について聞いていれば良かったのではないか？

いや、だめだ。母が話そうと、そして私に話してもいいと思えるまではやめておくべきだろう。たまに話してくれる思い出話で私は十分満足しているのだから。

とにかく、これで私の成長の方向性が定まった。目指すべきは自動回復ができるタン

ク役だ。敵の攻撃で強化し、守るべき人に被害が及ばないように受け流して動き回る変則的な盾役。

彼らに会うまであと9年。それまでに恥じるところがないよう成長できるだろうか？

出会い

早いもので、私は中学一年生になった。日課のランニングを終え、朝食をとり、真新しい制服に身を包む。まだ硬さの残る制服になんとも言い難い緊張を覚えるが、しばらくすれば慣れてくるだろう。

これから出会うのは3年間の付き合いになるクラスメイトなのだ、どうせだったら何人か友人ができたらいいなあ……

などと呑気に考えていた私に言ってやりたい。数十分後に転校できないか真剣に考えることになるぞ、と。

なぜって？

「デェクぅぅ……『無個性』のテメェがなんでこの俺と同じ中学に来てんだ？あぁ？」

「か、かっちゃん⊠いや、別に学区がたまたま同じなだけで……」

教室の扉を開けた瞬間、こんな会話……というより一方的な絡みが展開されていたからだ。自分の机で縮こまっている緑谷に、爆豪が難癖をつけている。

……お察しの通りではあるが、9年後と思っていたらそれより3年早く出会うことになった。

よく考えたら当たり前のことだ。そもそも私が彼と同学年であることを知ったのは個性検査の日に出くわしたからなのだ。つまり同じ地域に住んでいるのだから、中学が被ることは想定しておくべきだった。

そう。この2人と一緒ということは、あの下手したら自殺してもおかしくないような爆豪による絡みをほぼ毎日見なければならない。シンプルに精神にくる。

というかそんな環境でよく緑谷は折れなかったものだ。だいぶ卑屈というか内気ではあるが。それだけヒーロー、オールマイトへの憧れは強いということだろう。

……まあ、自分の前でいじめまがいの事をされるのは気分が良くないので流石に割って入るが。

「すまない、少しいいか？」

「あぁ？」

「ひゃっ、はい！」

2人ほぼ同時に返答が来た。これが幼馴染の力だろうか。仲良くなれそうなものなのに、双方拗らせているせいでどうにもならない。

「そこの、えー……トゲ頭の君、入学初日にクラスメイトを恫喝するのは人としてどうかと思うが。」

つい名前を言ってしまいそうになったが、それは不自然なのでなんとか避けた。というか本当に当たりがきつすぎる。3年ずっとこの調子なら逆にすごいぞ？

「これは俺とクソデクの問題だ。テメェは引っ込んでろ。……つかトゲ頭ってなんなんだコラー！」

「いや、これからクラスメイトになる人が変なやつに絡まれてたら声をかけるだろう？」

正直すごく声をかけづらいが。

すると、

「チッ、……もういい。」

と言ってこちらを一瞬睨み、音を立てて扉を開け出ていった。……違うクラスだったのか。わざわざ来て絡むなんて、捻くれ方が尋常じゃない。

そう思っていると、緑谷から礼を言われた。当たり前のことをしただけだし、ああいうのが続くようなら先生に言ったほうがいいぞというとなぜか怒涛の爆豪トークが始まった。

「かっちゃん……あ、さっきの子の渾名みたいなものなんだ。本当は爆豪　勝己って

いうんだけど、幼馴染なんだ。昔からすごくて、僕なんかとは違ってみんなを引っ張っていく存在で。頭も良くて、小学校では1番から落ちたことないんだ。ヒーローに憧れてて、『個性』も強い。『爆破』って言うんだけど、こう……手のひらで自由に爆発を起こせて、しかも本人が爆発に強いから攻撃、防御、移動にも役立つんだ。きっとすごいヒーローになれると思う。それにああ見えて冷静で、どんな時もうまく立ち回ることができる。いや……強いて言えば僕にはものすごく突っかかってくるんだけど、その原因は僕にはわからなくて。でも憧れちゃうよ、かっちゃんには。僕にもあんな風に『個性』があったらななんて……」

と止まる様子を見せなかったので、一旦落ち着けと言って軽く頭を叩く。まったく、こちらはこちらで拗らせすぎだ。爆豪のことを異様に上に見ている。まあ、運動に勉強にと才能があって『個性』もすごい奴を何年も見ていたらそうなるのかもしれないが。

「ご、ごめん、つい話しすぎちゃって……」

ははは、と笑って頭を掻いている。

「で、名前は？えーと、デク、だったか？」と聞くと、一瞬止まって、身振り手振りでわたわたしながら

「あっ、いや、それはかっちゃんの悪口みたいなもので……え、ええと、緑谷（みどりや） 出久（いずく）って

言います！」

と言った。いや、分かってはいるがそのあがり症はどうにかしたほうがいいんじゃないか？

「そうか、それはすまなかった。まさか悪口だとは思っていなかったんだ。私は火守橋華だ。よろしく。」

そう言って手を伸ばす。すると顔を真っ赤にして漫画調にカチカチになりながら

「よ、よろしく……」と握り返してきた。

……握手くらいでそう固まられるとこっちも困るんだが。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

緑谷視点

火守　橋華さん。

かっちゃんに絡まれ……襲われたときに止めてくれた人だ。かっちゃんにキレられても全く引くことなく「正しいこと」を言っていた。

僕にこの半分でも胆力があれば、なんて思ってしまう。いや、これは僕自身の問題だけど……。

それにしてもいきなり握手を求められちゃって、本当に焦った。え、握手って普通な

の？手汗かいてないかな⊠ってテンパってしまって、思いっきりガチガチになった。

変な奴だと思われてないかなぁ、と一人でネガティブになっていると隣の席に人が……。見ると火守さんだった。

嘘⊠

▽

口調は硬いけれど、全く悪い人じゃない。というよりすごくマイペースなだけの人なんだと思う。周りの反応を気にしないタイプだ。喋っているうちにそれを確信していると、火守さんに聞かれた。

「緑谷、それはオールマイトのキーホルダーか？」

「えっ⊠あ、うん、そうだよ！」

オールマイト。僕が最初に憧れた、そして一番憧れているヒーロー。大災害からあっという間に大勢の人を救い出したデビュー動画は、小さな頃に観てからずっと僕のお気に入りだ。いつかは彼みたいに、と思ってたけど……。

「ふん、すると将来はヒーローになりたいのか？」

なれない。そう、なれないんだ。なぜって僕は『無個性』だから。どんなヒーローも、

最低限の力つまり『個性』を持っている。でも僕にはそれが無い。

「ま、まあ、はは……。でも、僕『無個性』だし。」

諦めきれない。でもヒーローになれるとは思えない。だから曖昧に笑うしかない。だって僕は、

『『無個性』……？」

しまった、言ってしまった。『無個性』は第五世代（僕ら）の中にはほぼいない。どうしよう、火守さんにかっちゃんと同じような眼で見られたら。

そんな不安をよそに「……介入…未来……」となにかぶつぶつ呟いていたと思えば、僕の目をじっと見て言った。

「緑谷、君は無個性だからヒーローになれないと思っているのか？」

「えっ……うん……」

「なぜ？」

なぜって、そんなの決まってるじゃないか。でもそれを認めるのが嫌で言えずにいると、

「”無個性が弱い”からか？」

そうだ。その通りだと思い俯いてしまう。

すると彼女は、ふう、と息を吐いて言った。

「緑谷、放課後時間はあるか？」

「えっ、う、うん⁉？」

えっ、何⊠急に言われたから頷いちゃったけど全く理由がわからない！

「放課後、ちょっと付き合ってほしい。……ああ、もちろん迷惑だったらいいんだけれど。というか、よく考えてみれば会って1日も経ってない奴に誘われるなんて嫌だったかな。」

そ、そんなの……

一も二もなく頷いた。

合気

緑谷視点

火守さんに連れられてやってきたのは……道場、かな？一昔前の家みたいな瓦葺きの建物に、木製の看板が掛けられていて流麗な筆致で「廻天合気道場」と書いてある。

途中で教えてくれたことだけど、ここで3歳からずっと合気道を学んできたらしい。それだけじゃなく空手も。ヒーローになるためと、後何か大きな目標があったからだそうだ。もう叶ったんだ、と言って笑っていたけどやっぱりかっこいいと思う。

それに比べて僕は……勉強はできる方だけど、「ヒーローになりたい」と思い続けるだけでそれを実現するための努力なんてしてこなかった。趣味のヒーロー観察も諦めている夢に縋り付いているだけのように思えて情けなくなってしまう。

そんなことを考え込んでいる僕をよそに火守さんは遠慮なくガラガラッと扉を開き、

「こっちだ、来てくれ。」

と声をかけてきた。慌てて入ると、独特な雰囲気に少し気後れしてしまい小さな声で

失礼します、と言った。

中は外見から想像していたよりもずっと綺麗で、設備も整ってるみたいだ。型の稽古？をしてる柔道着みたいなものを着た人が十人くらいと、あと袴を付けた５０才後半くらいの人が１人。「師範」とか呼ばれてそうな感じだ。身体もかなり鍛えられてるみたいだし、ひょっとして元プロヒーローなのかな？

「廻天さん、ちょっとここを見せたい人がいたから連れてきたが構わないか？」

火守さんがその師範っぽい人にかなり遠慮がない口調で話しかけたのでギョッとしてしまう。稽古していた人たちも止まってこちらを一斉に見てくるのでなんだか居心地が悪い。でもその人は気にした様子も見せずに返した。

「おう、橋華か！まさか男連れてくるなんて思わんかったぞ！」

「あー、違うぞ廻天さん。この子……緑谷って言うんだが、ちょっと「人」の強さを見せようと思ってな」

そういうと僕に向かって大きめの袋を投げてきた。慌ててキャッチすると、柔らかい感触だったがずっしりと重い。中を覗き込むと、入っていたのは道着だった。

「そこの準備室でこれに着替えてくれ。着付けとかがわからなければこちらで調節するから大丈夫だ。」

……え？

不恰好ながらなんとか道着を着た（不思議と丈はぴったりだった）僕がゴワゴワした感触に慣れないまま準備室から出ると、そこには道着と袴を付けた火守さんがいた。

……改めて見ると、姿勢が本当に綺麗だと思わせられる。かっこよさを感じるのは、体に軸が一本通っているみたいな姿のせいもあるのかもしれない。そう思った。

すると火守さんは僕をじっと見て、急に近づいてきた。慌てて距離を取ろうとすると、腰をがしっと掴まれた。う、動けない……。

「そういえばこういうものを着た機会は一度もないんだったか。悪いことをしたな。」

そう言ってしゃがみ込み、不恰好な帯の結び目をするすると解いて結び直してくれる。なんか子供扱いされてるみたいで恥ずかしいし、顔が近い……！

照れている僕とは対照的に何も気にしない様子で帯を直し終わった火守さんは、満足げにうんうんと頷いている。

……そもそも、なんでここに来たんだっけ？

そう尋ねると、こう返してきた。

「緑谷は今日、〝無個性は弱い〟と言ったな？確かにその通りだ。増強系の『個性』には

力で勝つことはできないし、物を浮かせたり火を吹いたり、そういった特異なことは逆立ちしてもできる様にはならない。」

……自分で分かりきったことだけど、改めて言われると心が痛い。

「うん……だからヒーローには」

「でもヒーローにはなれる。」

え？

「力がないって話だったのにどうやってなれるっていうの？」

「まず一つ目の理由。力のみでヒーローになれるかどうかが決まる訳ではないだろう？例えば、戦闘に向かない『個性』でもヒーローをしている者はごまんといるはずだ。」

あっ。

言われてみれば確かにその通りだ。いわゆる補助向けと呼ばれる様な『個性』のヒーローは意外と多い。

「そして二つ目。『個性』は拡大され分岐した身体能力であり、またそれを使うのも人間だということだ。」

……どういうことだろう？

「ごめん、ちょっとよくわからない……」

「ああ、そうなると思っていた。」

だから見せるためにここへ連れてきたんだ、と言って笑った。

▽

「稽古の途中に申し訳ないが、『個性』使用有りの実践的な組み手をしたい者はいないか？」

そう火守さんが言うと、そこにいた門下生の人たちはおお、と声を上げて盛り上がっていた。

それはそうか。見たところ異形型の『個性』の持ち主はいないみたいだし、自由に使っていいところは著しく限られるんだ。例えば、元プロヒーローが監督する道場とかを除けば。とは言っても怪我してしまった場合監督責任になるからそう簡単にはできないし。

「相手は私だ」

それを聞いた途端、盛り上がっていた声が一気に小さくなった。……え、火守さんってそんなに恐れられてるの⁉？

「とはいっても私は『個性』を使わないから安心してほしい。」

あ、落ち込んでた空気がちょっとだけ戻った。って、『個性』なし☒そんなの無茶だ！

そう思って見回すと誰も火守さんの心配をしていない。……これはどうすればいいんだろう？

ひそひそと話し合っていた人たちの中から、頷きあって3人出てきた。

うわ、みんな身長が僕より頭2つ分くらい大きい☒火守さんは僕より背が高いけど、さすがにこの人たちと比べると小さく見える。やっぱり、無茶じゃないか！

決心して飛び出そうとしたけど、その瞬間に肩をがっちりと抑えられた。足に力が入らなくなって、ストンと座ってしまう。見上げると、さっき廻天さんと呼ばれていた人だった。

「まあ落ち着いてくれ、坊。あいつはあの3人じゃどうにもならんからよ。」

「で、でも……」

「あいつらでどうにかなってたら、俺はあと3年くらいはあいつの師匠をできただろうよ。」

「え？」

そう言われて、思わず聞き返す。この人、火守さんの師匠じゃなかったの？

「まあ見とけ、あれが技ってもんだ。」

慌てて見ると、もう組手ははじまっていた。

って、一人がいきなりタックルを仕掛けた！足を踏み出すたびに床が破裂する様な音を立ててる。ひょっとして増強系？

組み手って普通、技と技で勝負を決めるものじゃないのか？と思ってしまう。いくら技があっても、あんな身体能力任せにこられたらどうしようもないはずだ。

そう思っていたけど、火守さんの動きは僕の予想を超えていた。

低い姿勢でタックルを仕掛ける人の顔面、というより目のスレスレを手で払い、反射的に立ち止まったところで肩に手を入れて……

１８０センチを超える屈強な、しかも『個性』持ちの男性がひっくり返った。

次に仕掛けたのは２人同時。腕からゴムの様なものを伸ばす人がそれを振るい、あれは……「硬化」とかかな？肌が岩の様になっている人がガードを固めたままジリジリと近寄っている。

これはさすがに攻められないんじゃないか。そう思っていたけど、決着がつくのはあっという間だった。

腕から伸ばしたゴムを鞭の様に振るったけど、その軌道を読まれ回避されてしまう。しかもそれを引っ張られてバランスを崩した。慌ててもう片方の手からもゴムを出し、

体を支えたけど火守さんがいなくなっていることに気づかず、後ろから首に手をかけられて敗北。

疑問に思ったので思わず聞いてしまう。

「あの、廻天、さん？」

「どうした、坊。」

「あの人……なんで火守さんが後ろに回ったことに気付いてなかったんですか？」

さっき、ゴムを引っ張った直後に火守さんはあの人の後ろに回りはじめていた。でも別に追えない速さでもなんでもなく、しかも目の前にいた人が移動したら気づかないはずがない。

そう聞くと、廻天さんはそりゃそうか、と呟いてから教えてくれた。

「それはな、人の意識が一つしかないからだ。」

どういうことだろう。僕が内心で首を捻っているのを察したのか、そのまま続けた。

「あの瞬間、張五ーーー手からなんか出したあいつなーーーの意識は「自分が引っ張られ、体勢を崩したこと」と「それに気づいて立て直すこと」にのみ向けられた。だから気づけない。人が動くという大きな変化が目の前で起きているのに、自分にのみ意識を向けた。理屈として言えば、そうなるな。」

……なるほど。言われてみればもっともな理屈に思える。
そう納得して「硬化」の人に視線を戻すと、ボクシングに近い動きをしていたけど、全く当たる様子がない。パンチが全部火守さんの顔スレスレで止まっている。そして右の大振りな一発を回転して避けられていた。そのまま内側に入り込まれ、綺麗に投げられる。
倒された3人は立ち上がって、「ありがとうございました！」と礼をしている。

結果、火守さんは無傷で『個性』を使った3人に勝った。

すごい。そう思ったけど、つい嫌な考えが頭をよぎってしまう。ーーー火守さんは、こっそり『個性』を使っていたのではないか？と。
我慢できず、廻天さんに再び聞いた。
「廻天さん、あの、確かに凄かったですけど……火守さん、本当に『個性』使ってないんですか？」
その瞬間、廻天さんの目が一気に鋭くなった。でも、すぐに元に戻る。
「ああ……皆んな最初はそう言うんだ。でも違う。なぜかわかるか、坊。
簡単だーーーあいつが『個性』を使ったら、一歩も動くことなくあれと同じことがで

きるからだ。」

そんなに凄い『個性』なのか。そう思った僕に、廻天さんは続ける。

「それと……俺は人がその意志により習得したものを簡単に「ずる」だと思って理解しようとしない奴はあんまり好きじゃねえ。」

その言葉にハッとする。そうか、僕は火守さんの努力を、磨いてきたものを、勝手に手の届かないものだと思い込んで羨んでしまったんだ。そう気づくと、自分の情けなさに涙が溢れてくる。すぐ泣いてしまう、僕の悪い癖。

「すっ、すみませっ、僕っ、自分が『無個性』でっ、僕に出来ないからきっと『個性』なんだって、ひっ、火守さんの努力も知らずっ、」

廻天さんがおろおろしているのが目に映る。ああ、この人良い人なんだ。そう思っていると、

「廻天さん、なぜ緑谷が泣いている?」

という、不機嫌そうな火守さんの声が聞こえた。

火守視点

緑谷に見せるための組み手を終えて戻ると、何故か師匠が緑谷を泣かせていた。師匠の顔が怖いからかなと思っていたが、違うようだ。

事情を聞いた。なるほど、確かに『個性』持ちにそれ抜きで勝てるとは思わないだろう。『個性』を特別視している緑谷なら尚更だ。

それはともかく、２人にそれぞれ言うべきことがあるな。２人に座ってくださいと言い、続ける。

「まず緑谷。確かに『個性』持ちを圧倒できることが当たり前でないという認識は最もだ。ただ、私が先程言った様に『個性』はあくまで身体能力の一環だ。だから増強系でもよほど飛び抜けた強化倍率でない限り関節を極めれば拘束できるし、重心がずれれば転ぶ。飛び道具持ちもそれを操るのは人間ということを理解していれば対策もできる。これは『無個性』だからできる戦い方なんだ。それをわかってほしい。」

「そして廻天さん。私のことを思ってくれるのは嬉しいが、理屈をわかっていないなら『個性』だと考えるのもしょうがないと思う。」

「いや……橋華が連れてきた奴が橋華の努力を無視してると思ったら、つい……」

「だってもへちまもない。……２人の気持ちは理解しているんだ、双方謝って手打ちに

してくれ。」

そう言うと2人は、

「……強く言いすぎたな。すまん。」

「いえ!元はといえば僕が悪かったんです!」

と謝りあった。

緑谷に『無個性』でも戦えるということを見せるだけのはずがまさかこんなことになるとは。そう思ってため息をついた。

師匠

さて、やっと本題に入れる。

「緑谷、さっき私がなにをしたのかを改めて説明していくぞ。」

基本的に合気道は、人間の自然な反射や力を使う武術だ。だから「なぜそうなるのか」を理解しなければ、完全な習得には至らない。

「まず最初。増田さんのタックルから始まったが、あれは実にいい選択だった。」

「あのタックルが？」

緑谷は不思議そうだ。

「そうだ。タックルは避けるも受けるも難しい。特に増強系がこれをすると、生半可な防御では簡単に押し倒されるだろう。」

そこで、と目を指差す。

「ここを狙う。接触したら指を持っていかれそうだから、触れずに、だが反射で目を瞑ってしまう位置で叩いた。」

「そして一瞬止まったところで、腕を極めた。もちろん力比べをしていたなら力負けし

て出来なかっただろう。だが目を瞑るという空白がそれを可能にしたんだ。そうすれば、いくら増強系といっても関節や重さはただの人間と変わりないから投げられる。……ここまではいいか？」

首をブンブンと勢いよく縦に振っている。……わかった、わかった。

「では次に。遠距離もちの張吾さんだがーーー」

「あー、悪い、橋華。それ大体俺が坊に説明しちまった。」

「……何？」

え、そ、そうか。正直これが一番説明したかったんだが……。体の崩し方、意識を逸らすこと、手が届かない場所からの攻撃の対処と色々あったのにな。師匠もやってくれたものだ。

「えーと、じゃあ印鉄さん、あの「硬化」に近い『個性』の人と戦った時のことを話そう。何か聞きたいことはあるか？」

そう聞くと、緑谷は「じゃ、じゃあ……」と一つ質問してきた。

「あの人のパンチが全部当たらなかったのはどうやったの？」と。

実演するために緑谷を立たせて指示する。

「緑谷、そこに立ったまま私に向かって手を伸ばしてみろ。」

そういうと、少し躊躇ってから真っ直ぐ手を伸ばしてきた。限界まで伸ばし切って

も、移動することでさらに手を伸ばさせる。緑谷の姿勢が崩れて、プルプル震えている。
……ここだな。
「そこから、私に触れるか？」
「いやっ、どうやっても、無理ぃ！」
どんどん振動が大きくなっている。さてはかなり体幹が弱いな？
「そう、無理だ。人の攻撃範囲には必ず限界がある。それを見極めれば、絶対に当たらないことは容易い。特に殴る場合は手を伸ばした後に引かなければならないから、その範囲はさらに狭くなる。そしてーーー」
緑谷の腕を掴み、ふわりと一回転させて投げる。……相手を怪我させないというのは結構な高等技術なのだ。
目を見開いている緑谷に続ける。
「ーーー伸びた腕により重心はずれ、掴むことはより容易になる。すると投げるも押さえるも自在だ。」
緑谷はしばらく放心していたかと思うと、姿勢を正して問うてきた。
「火守さん、僕も……あなたみたいになれますか？」
「私になる必要はない。ただ、君の望むところへ辿り着くことはできるはずだ。心を保

ち、技を磨き、体を鍛えれば。」
「なら……僕は、ヒーローになれますか？」
「なれるだろう。それは保証する。私がしたように、『個性』相手でも立ち回り次第で制圧可能だ。……まあ、私並みになれるかはわからないが。」
「なら…なら、僕を、ここで強くしてください！」
「分かった。……ただ、ここの師範は廻天さんでな。話はそちらで通してくれ。私もサポートするが。」

目一杯のお辞儀をする緑谷の肩を、優しく撫でながら頓珍漢なことを言う火守。その姿に、大也と組み手3人組は耳打ちしあう。
「師範……なんで火守さん、あのヒョロい子にあんな熱心なんですか？」
「親戚とか？」
「いや、俺も知らん。なんかクラスメイトらしいが……」
「まさか一目惚れ？」
「な、何い⁉？」
「落ち着け、お前ら。……だが察するに、あの坊が『無個性』ながらヒーローに憧れてるのを知って助けてやりたくなってる、てとこか。」

「あー。」
「火守さん、愛想ないですけど凄い優しいっすからね」
「俺も今日褒めてもらったし」
「全く、浮かれるなよ。……というか、なんだ今日の組み手は！いくら橋華が相手ったって、合気を使わないやつがいるか！」
「でもそれじゃ勝てないんですもん」
「中1に技で負けるな！」
「師範も勝てないのになんでそんな風に言えるんですか！」
……今日の道場はいつもより賑やかだった。

▽

さて、緑谷の前で彼を導く師匠の様な振る舞いをしたーーー言い換えればかっこいいところばかり見せ続けたーーー火守　橋華は、家に帰ってすぐ布団に飛び込み、声にならない声をあげてゴロゴロと転がっていた。彼女に心打たれた緑谷がみればちょっと冷静になりそうなレベルの醜態であった。

今日は緑谷（主人公）との初遭遇で、かなりテンションがおかしくなっていたことを自覚している。加えて『無個性』であることに自信をなくしていた彼に勇気を与えたい、と思った結果あんなことをしてしまった。

……後悔はしていない。だが、だが……ああ！何が「君はヒーローになれる」だ！オールマイトの言葉をそのまま使っただけじゃないか！一度気づいてしまうと恥ずかしい。特に私は彼（オールマイト）のように歯の浮く様な台詞を出せるような人間じゃない分、役割を演じるのをやめるとその反動が一気に押し寄せてくる。緑谷に敬語を使われてしまったのも恥ずかしい。……明日どのスタンスで話せばいいかわからなくなってしまう。

……まあ彼が中学卒業、そしてＯＦＡを継承するまでに体を作ることができると思えばプラスだろうか。

一度彼に師匠面をしてしまったのだ、役目が終わるまでーーーオールマイトと出会うまでは彼の夢をサポートするのが筋というものだろう。彼は４年後には私なぞ飛び越えたヒーローになっているのだから。

となると、彼に最低限の身体を仕上げてもらうためのプランを考えないとな。

翌日、放課後近くの喫茶店に緑谷と訪れた。理由はもちろん、緑谷がヒーローになるための戦略を伝えるためだ。

「緑谷、君にはヒーローになる、そしてそのために必要なヒーロー科に合格するには圧倒的に足りていないものがある。何か分かるか？」

「やっぱり、技？」

「不正解だ。正しくは、その前段階の話だな。」

「えーっと、体力？」

「そうだ。……君は、どこのヒーロー科に行きたいと思っている？」

「あの、笑われるかもしれないけど……雄英、に。オールマイトの出身校なんだ。」

「誰が笑うか。いいか、世の中3年あれば大体のことはできる。とにかく、希望は大きく持っておけ。」

「あ、ありがとう。」

「で、その雄英には日本トップクラスのヒーロー科がある訳だがその受験生は『個性』だけで突破していくわけがないのは分かるな？」

「そう……だね。」

「故に体力だ。『個性』がない分、そちらだけを鍛えればいいのは利点だな。」

「そんなこと、考えもしなかった……」
そう。『個性』がない緑谷は体に絞って強化できる。成長期が始まる今みっちり鍛え込めば、技と併せて並の『個性』持ちに勝てるはずだ。
故に、緑谷改造プランを提示する。
「スタミナを上げるためのランニング……まず３ｋｍからはじめて、徐々に上げていこう。加えて自重を使ったトレーニングに、体の柔軟性も向上させる。詳しくはこれを見てくれ。」
そう言って、紙の束を渡す。昨日まとめたもので、私の時の経験から立てた計画だ。
「これは……なかなかハードだね。でも……」
「でも?」
「僕がヒーローになれる道がこんな風に現実的に見れる日が来るなんて思わなくて。なんか……嬉しいんだ。」

その言葉に、一瞬胸が詰まる。……そうか、緑谷。君はこの若さで、まだ自分に夢をみてもいい幼さで、その夢を否定され続けていたんだ。
「気にするな。私は、したいようにしているだけだから」
だから、せめて力を貸してあげたいと思ってしまうのは当然だ。それがエゴだとして

も。

「火守さん。どうして火守さんは……僕にこんなに親切にしてくれるの？」

そう思うのは当然だ。だが、私は知っているからだ。君が、『無個性』でありながら人を救けるために飛び出すことができる人間だということを。私よりよほどヒーローに相応しい人間だということを。

「緑谷のことが、気に入っているからだよ。」

志望

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ」

ヒーローを目指すなら体力はつけるに越したことはない、と2年前に緑谷に言ったが、私もそのためのトレーニングはしている。

何かといえば、往復２０ｋｍのランニングを朝晩2回、それを行きに３０分、帰り２０分かけて行うことだ。

１０ｋｍを２０分で走るのは『個性』が存在しなかった時代の最高記録を余裕で超えているが、これには理由がある。

そう、『個性』の成長だ。

私の『個性』の本質を理解してから、ずっと悩んでいた。「吸収」したエネルギーを細胞の強化以外に使えないかと。意識してエネルギーを使うため、電流を浴びてみたり、全身を火で熱して冷やすことを繰り返してみたり、手からエネルギーを打ち出すイメージトレーニングをしたりしていた。

転機が訪れたのは4年前、自分の限界を超えて走る訓練をした時だった。私は汗をかかない。運動による発熱も火と同じくエネルギーとして吸収できる。故に、脱水の心配もなく純粋に体力の限界まで走ることができたのだ。蓄積した疲労の結果出た脳内麻薬が尽きるほどに。

疲れ果て、指を動かすのも苦しいほどに減った体力。思考も靄がかかったようになり、「女子小学生、走りすぎて死亡」なんて馬鹿みたいなニュースが流れるのではないかと危機感が募り始めた時だった。

突然、体が軽くなった。

全身に活力が満ち溢れてきて、驚きのあまり飛び上がりそのことにまた驚くような状況だった。落ち着いて原因を考察した結果、判明した。

私は、吸収したエネルギーを直接体に作用させることで活動を可能にしていたのだ。

そのことに気づいた時はとても嬉しかった。もう自分で伸ばせるところは伸ばし切ったと考えていた『個性』が、壁を越えたから。

これを『体喰（テイク）』と名付けた。

……いいだろう、別に。やっていることは栄養補給と変わらないが、『個性』を使っているのだからせめて格好良くしたいのだ。

細胞そのものの繋がりや、その繋がりを強化しているエネルギーも意識して利用する

ことすらできるだろうことは確信しているが、怖くて試していない。間違って体が崩壊とか、そういうリスクは避けたいのだ。

というわけで行きは自身のスタミナ、帰りは常に全力で走ることで『個性』を鍛える。この二段構えによって体力は爆発的に向上した。そして全身にエネルギーを流し続けていた結果か、身長も筋肉も恐ろしいほどついた。そして何故か胸も。まあこれに関しては心臓という致命的な弱点を防御するのに有効なので言うことはない。

走りながら、内心では学校に行くのが楽しみで仕方がない。なぜか？今日は中学3年生になって1週間経った日であり、進路希望を書く日だと担任が言っていたからだ。

そう。ついに、原作と同じ時期にたどり着いた。思い起こせば、知識が流れ込んできてからの12年はかなり長かった。

ドクターの目から逃れるため自分の『個性』を偽る訓練をして、『個性』を成長させようとするとなぜか私の『個性』が「ショック吸収」でないことが判明し、「体喰（テイク）」を習得し、緑谷と出会い彼を鍛え、そして今に至る。こう書くと大したことはないかもしれないが、私にとっては大きな出来事ばかりだったのだ。

今まで緑谷の師匠のような役割を2年間してきたが、それも終わりになってしまうと考えるとかなり寂しい。だが、彼をーーー未来のＯＦＡ継承者を導くことができるのは、その精神性も含めてオールマイトしかいないだろう。ここは涙を飲んで彼に譲ろう

と思う。

そして家に帰り、朝食を食べ、学校への道を歩く。その途中で緑谷と合流した。

そう。彼の家は私の家から学校に行くまでの道にあるのだ。登校時にたまたま出会って以来、ずっと一緒に登校している。

「緑谷、おはよう。」

「あっ、おはよう火守さん。」

一年生の時は挨拶をするたびにビクッとなっていたものだが、２年もあれば変わるものだ。それは肉体面でも顕著であるが。身長は１６９センチほど。これは本来の彼の身長より若干高いくらいだろうが、そこについた筋肉は大違いだ。

首は細いがしっかりと締まっていて、肩幅は服を脱げばかなりあるのが見て取れる。そして前腕は掴み、投げるために発達している。胸板はそこまで厚くないが、十分な量を蓄えさせることに成功した自慢のものだ。そして発達した腹斜筋に、かなり太い大腿部。脚は全ての動作の基本なので、執拗なくらいにつけさせたのだ。そして下肢は脹脛の筋肉がはっきりした筋を作っている。

私が直接みて筋肉を育てていったので、自画自賛のようになっているが。あれはかなり苦労した。

筋肉がつきすぎないように――――緑谷はオールマイトに憧れているからきっとアメリカンな筋肉をつけたかったと思うのだが、彼が今身につけている技とあの体型は相性が良くないのだ――――調節したり、筋肉をつけつつも関節の可動域を落とさないようにしたり。あとその過程で生じる体の歪みを無くすために全身の筋肉の張り具合を診て按摩の真似事もした。合気道は体の構造を利用する分自然と詳しくなるし、自分でも色々調べたので少しはそうしたことができるのだ。

そんな私の密かな充足感に気づくことなく、緑谷は話題を振ってきた。

「今日の進路希望調査、もうどこか決めてあるんだよね！」

「ああ、前にも言った通り私は雄英だ。……緑谷と枠を争うことになるのは少し心苦しいがな」

「そんな、火守さんは僕に遠慮なんてしないで！……僕も、遠慮はしないから。」

「ふっ、そうか。それは楽しみだ。」

そんなふうに話しながら歩いていると、遠くで地鳴りのような音が響いた。

見れば、鉄道橋の上で９ｍほどの巨大な男が暴れている。

「うわっ、でっけー敵（ヴィラン）！」

緑谷がそう叫び、野次馬の間に割り込もうとするが、こちらを振り向いて立ち止まる。

「あっ、ご、ごめん。ヒーローが来てると思うとつい……」
「まったく、ヒーローがいるとはいえ近づけばどうなるか分からないんだから気をつけろ。」
「えへへ……」
このヒーローへの好奇心の強さ、憧れは一種の才能だな。「将来のためのヒーロー分析」というノートは13冊、一度見たがびっしりと書き込みをしていた。正直少し引くほどだった。
「あっ、あれはシンリンカムイ！人気急上昇中の若手実力派!!?」
駅の屋根の上に乗っている人影か。よくわかるなと思っていたが、腕から何か伸ばしている。なるほど、あれか。ヒーローの特徴と担当地域から割り出したんだな。すると人影の腕が膨らみ、枝が一気に伸びる。
「出た！先制必縛――――」
だが、緑谷がその技名を言い切る前、そしてそのヒーローが技を当てる前に巨大なはずの敵（ヴィラン）のゆうに倍はある女性が
「キャニオンカノン!!?」
と叫び飛び蹴りをかましていた。ズン……と地面が揺れる。
「なんだあの人⊠全く知らないぞ？ということは新人かな……。それにしても巨大

化か。人気も出そうだし凄い『個性』だと思うけど……」

と呟きながら「ヒーロー分析」に書き込み始めていたので、頭に軽くチョップして言う。

「時間はあるが、あまりのんびりしていると遅刻するぞ？雄英を受けるなら内申を下げるわけにはいかないだろう？」

「あっ、そうだった！」

そう言ってわたわたとノートをしまい始める。

再び歩き出したところで、緑谷に尋ねた。

「緑谷、あの敵（ヴィラン）、君ならどう対処する？」

かつての緑谷なら答えることも、ましてや考えることすらなかっただろうことを問いかける。すると、

「うーん、定石は狙いにくい足元中心に攻撃してして隙ができた上半身を狙うことだけど、それだと線路の被害が大きくなるかもしれないし……」

「そうだな、今回はかなり特殊な例だ。となると……」

『個性』持ちの敵（ヴィラン）を倒すことを実現できるものとして考えている。その事実に嬉しくなった。

「えーお前らも3年ということで‼?」
「本格的に将来を考えていく時期だ‼?」
「今から進路希望のプリント配るが　皆‼?」

「だいたいヒーロー科志望だよね」
その担任の言葉とともに、生徒たちは手を挙げるとともに自らの『個性』を一斉に発動する。手から棘を出し、岩に変え、火を吹き、首を伸ばす。
後半は大道芸の部類じゃないか?と思ったが、それらは皆彼らの自慢すべき『個性』だ。それを発揮する場が欲しくてたまらないのだろう。
「うんうん皆、いい『個性』だ。でも校内で『個性』発動は原則禁止な!」
担任はそう言うが、あくまで人に危害が及ぶ程度でなければいいという考えだ。『個性』を発動させているかどうかを識別する機械があるわけでもないのだから。
そう『個性』を使い続けながら考える。発動時とそうでない時で変化がないのはありがたい。

すると1人、声をあげる者がいた。
「せんせえ――――「皆」とか一緒くたにすんなよ!俺はこんな『没個性』供と仲良く底辺なんざいかね―よ!」
爆豪だ。この自信は彼の才能と努力の結果だからなんとも言いにくいが、言い方と態度はどうにかならないものだろうか。
「あー確か爆豪は…雄英志望だったな。」
その言葉にざわめき出す生徒たち。当然だ。余程自信がなければ、いやあったとしてもそこに挑戦する者はそういない。なにせ倍率は３００倍を超えるという。故に選りすぐりの猛者が集まるのだ。
それに気分を良くして己の夢、オールマイトを超えたヒーローになり高額納税者ランキングに名を刻むことを語る爆豪。いや、現実的な夢ではあるがＮｏ．１ヒーローになってすることがそれか?と思わずにはいられない。
だが、彼の高笑いはその後の担任の言葉で凍りつく。
「そういや緑谷と火守も雄英志望だったな」
その言葉で一斉に緑谷を見る生徒たち。……私には目を合わせる奴がいないのが不思議だが。いや、1人いるな。爆豪が私を殺しそうな眼で睨みつけている。
その理由だが、心当たりがある。入学式以降徐々に体が出来上がっていく緑谷が気に

入らなかったのか絡んでいた時に、爆豪は個性『爆破』で彼を襲おうとしていた。それに気づいた私は爆豪の手を握り、爆発を握りつぶしたのだ。それ以来気に食わない奴認定されたのか私も絡まれるようになった。だが校内で出せる爆発程度の熱と衝撃ではどう転んでもダメージを負うことはなかったので、問題なかった。

そして緑谷に対する周囲の反応だが……実は悪くない。彼は元々頭はいいし、私が作り上げた肉体は女子の間で噂になるくらいなのだ。その童顔とのギャップがいいという者もいて、たまに告白したという話を聞く。どうやら成功したことはないようだが。

彼のイメージは「無個性なのにすごく頑張っている奴」であり、『弱個性』と呼ばれる人々の星になっているらしい。

なので、「頑張れよ!」「強い『個性』持ちに一発かましてくれ!」という言葉が聞こえる。後者は爆豪に睨まれて別の方向を向いた。

うん、良い。

出会い

学校からの帰り道を緑谷と歩きながら、私は今後の展開を思い出していた。
えー、ヘドロ敵（ヴィラン）に襲われたところをオールマイトに助けられ、その後彼の正体を知る。そして「ヒーローになれない」と言われ絶望したものの爆豪を助けるために飛び出して、オールマイトの目に留まる……

ちょっと待て。

オールマイトが緑谷を見出したのは、緑谷が彼にしがみついてまで「無個性がヒーローになれるか」を聞いた結果である。だが、今の彼にそんなものが必要だろうか？
努力を認められ、自分に誇りを持ち、信念を持っている。例えオールマイトにあったとしても、彼を足止めすることは無いだろう。するとオールマイトは敵（ヴィラン）を落とさず、緑谷が爆豪を助けず、つまり……
一気に冷や汗が出てきた。

　このままでは、ＯＦＡの継承者が見つからないか、あるいは別の者になる可能性がある。そうなった場合何が起こるのか私には想像できない。原作でも、ギリギリのバランスを保って事態は進んでいたのだ。
「――――さん？」
　つまり、私には何としてもオールマイトに緑谷を認めてもらうための展開を作り上げる必要があるということだ。
「あの、火守さん？」
　出来るかな、と不安がよぎるが、やるしかない。やるしかないのだ。
「火守さん！」
「はっ？……ああ、何だ。どうした？」
「いや、急に黙りこんでたから心配になって。何か困っていることでもあるの？」
　困っている。それはもう困っている。縋りつきたいくらいには困っている。
　だが緑谷に言ったところでどうしようも無い。だから、これは私のみで対処しなければならない。
「いや、何も。少し考え事をしていてな。」
「そっか、それは良かった！」
　ふと前を見ると、ガード下の短い通り道。「頭上注意」という看板がかけられていて、

床面にはマンホール。

……ここだ。ここが、あのヘドロ敵（ヴィラン）と出会った場所。上手く出会いますように、と祈りつつゆっくり歩くが、出てくる気配はない。

「なあ、緑谷。」

「どうしたの、火守さん？」

「ここ、何かいる気配がしないか？」

前を歩く緑谷に声をかけ、苦し紛れの時間稼ぎをする。

「えっ、どこに？」

そう言って緑谷は当たりを見回すが、いるはずもない。

「……何もいないよ？」

「そうか？……そうだな。」

「火守さん、やっぱり今日調子悪い？」

いや、むしろ良かった。帰り道に入るまでは。

「……やっぱり、何かいないか？」

こうなればヤケだ。緑谷は優しいから、私に一応付き合ってくれることだろう。私への評価が”ヤバい人”になるだろうが、知ったことか。ここで成功させねばもっとヤバいことになるのだから。

「やだなあ火守さん。ほら見てよ。何……も……」
緑谷の言葉が不意に途切れた。それとともに、ズブズブと液体が這いずるような奇妙な音が聞こえる。これは、もしかして……
『Lサイズの……隠れミノ……!!?』

来た！
思わず喜びの声をあげそうになったが、堪えて「危ない、緑谷！」と言って彼を突き飛ばす。私ならともかく、緑谷がこいつに襲われた場合ひょっとすると後遺症が残るようなことになりかねない。従ってここは敢えて私が襲われるべきだろう。

そして、私は呑まれた。

うん、かなり不快だ。知らない他人に体を触られていると思うと気持ち悪いし、鼻と口を塞いでくるので鬱陶しい。
『助かるよ……キミは俺のヒーローだぁ……』
この状態で話されると、体全体に声が響く。というかどうやって発声してるんだ？そ

う呑気に考えていると、濁った視界越しに緑谷が動くのが見えた。

緑谷視点

今日の帰り道、火守さんの様子がずっとおかしかった。急に無言になるし、立ち止まって何かがいると言いだすし。でも……

まさか、あんなのが出るなんて……!

危ない、という声で火守さんに突き飛ばされた僕が見たのは、濁った色をした流動体に目と口がついたバケモノ。そして、それに包み込まれる火守さん。

思わず固まってしまうが、すぐにあれが敵(ヴィラン)だと気づいて思考を巡らせる。

火守さんを助けないと！なにかあいつの弱点は？体はスライムみたいに動く、多分攻撃は効かない。じゃあどうする？火は……持ってないし、火守さんも巻き添えになる。

じゃあ眼は？あの体の中で唯一浮かんでいる器官。それだけは流動体にできないんじゃないか？眼を狙って意識が逸れ、拘束が緩んだ瞬間に引っ張り出せば――

そう考えて動き出そうとしたとき、抵抗が見られない火守さんに敵(ヴィラン)が語りかける。

『助かるよ……キミは俺のヒーローだぁ……』

その言葉を聞いた瞬間、僕の中で火守さんとの思い出が駆け巡った。

はじめて出会った時、かっちゃんに絡まれた僕を助けてくれた。『無個性』でも戦えることを教えてくれた。僕に付き合って強くし続けてくれた。そして何より。

僕がヒーローになれると、初めて手を差し伸べてくれた。

「その人は！僕の！ヒーローだぁぁぁ！」

叫んで、走り出す。今まで僕に何の警戒もしていなかった敵（ヴィラン）が腕を伸ばしたところで体を低くして避けた。狙いが外れた腕は地面を叩いたものの、その衝撃は小さかった。……やっぱりだ！あいつ、体は大きく見えるけど力自体はそんなにないんだ！

そのまま走ってある程度近づいた――――言い換えれば投げるのに適していない物を投げても外しようがない距離まで近づいたところで、眼を狙って荷物を投げる。びっくりして怯んだようだけど、大きな手で薙ぎ払ってきた。

それを鞄で受け、押し返す。こいつには点の攻撃は多分効かない。体の流動性で無効化されるから。でも面なら受け止められる。そして押し返すと、その力の弱さのおかげで簡単に腕を弾くことができた。

そして叫ぶ。

「火守さん！手を！」

火守さんは目を大きく見開くと、ぼくの手を握り返してきた。そのまま引っ張る。こいつには力はないけど、流動する体の拘束力は高い。だから火守さんを出すには、腕だ

けじゃなく全身の力、体重も利用して一気に引っ張らなきゃ無理だ。
「はあああああ！」
転がるようにして腕を引っ張ると、抵抗はあっけなく弱まった。
文字通りの全力で引っ張った僕はこけそうになって目を瞑ったけど、その前に腕を引かれた。
「助けられたな、緑谷。……ありがとう。」
そう言って火守さんは、また僕を助けてくれたんだ。

火守視点

緑谷のヒーロー性をなめていた。あのまま私が捕まり続けるのが最良ではあったが、あの瞬間の緑谷の真剣な表情に、思わず手を伸ばしてしまった。ああいうところが私のような人種と彼の違いだな。
「火守さん、逃げないと！」
体をさらに大きくし、明らかにブチ切れた様子の敵（ヴィラン）を見て緑谷が言うが、私はただ「もう大丈夫だ」と答えた。

なぜって？

「私が　来た！」

彼が来たのだから。

そこから先はあっという間だった。

彼が「《ｒｕｂｙ》ＴＥＸＡＳ　ＳＭＡＳＨ《／ｒｕｂｙ》！」

と拳を一振りすると、その風圧だけで敵（ヴィラン）は全身を吹き飛ばされた。

「そこの少年！よく彼女を助けてくれた。なかなか出来ることじゃあないぞ！」

オールマイトは私が全身を取り込まれたことで退治しあぐねていたらしいのだが、緑谷が私を引っ張り出したおかげで動くことができたようだ。

そして憧れの人にそう言われた緑谷は興奮しっぱなしで、サインを書いてもらうまでずっと言葉が出ていなかった。

「キミは大丈夫か？ずっとあの敵（ヴィラン）に拘束されていたようだが……」

立ちくらみとか、精神的に辛いとかないか？とオールマイトが聞いてくるが、問題ないというしかない。

「何も。『個性』のおかげで耐久性には自信があるんだ。」
あいつの力はそこまで強くなかった上に、口鼻を塞がれても吸収したエネルギーを使えば気絶はしない。
「そうか、それなら安心だ！じゃあ、私はこいつを警察に届けてくるのでこの辺で！液晶越しにまた会おう！」
そう言って敵（ヴィラン）を詰めたペットボトルをポケットに詰め、跳ぶ準備を始めた。
「オールマイトさん、あなたにどうしても尋ねたいことがあるが駄目か？」
「Ｎｏ！ヒーローは常に敵か時間との戦いさ！」
せめて、緑谷が『無個性』であることをここで印象づけられれば一番良かったんだが……仕方ない。
「緑谷、ちょっと掴まってくれ。」
「え、う、え？」
時間が惜しいので戸惑う緑谷を片手で抱き寄せる。そしてもう片方の手で、
「それじゃあ今後とも、応援よろしくね――――！」
とオールマイトが跳ぶ寸前に彼のズボンに腕を回した。
「って、コラコラ――――！離しなさい、熱狂がすぎるぞ！」

跳んでしばらくした後、私たちの存在に気づき、離そうとするオールマイト。だがそれは駄目だ。

「申し訳ない。それをすると私はともかく緑谷が助からないので拒否させてもらう。」

「あ、確かに。って名も知らぬ少女‼?この状況であまりに冷静過ぎないか⊠」

「私にも事情があってな。どうしてもあなたに聞きたいことがあるんだ。」

「それはダメ‼?とにかく適当な建物の屋上に降りるからそのままで!」

そう言って腕を軽く振り、軌道の調節を行うオールマイト。やはり尋常ではない。その身体能力も、技量も。経験の濃さと言ったほうがいいだろうか?

そして言葉通りビルの上に降り立った。まだ理解が追いついていない緑谷の肩を支え、また跳ぼうとするオールマイトに声をかける。

「聞きたいのはこの緑谷のことだ。」

「ダメ‼?私はマジで時間ないのでこれで‼?」

「彼は『無個性』だが、ヒーローに憧れている。いつでも笑顔で人を救けるあなたに。そしてそのために努力を続けてきた。彼はヒーローになれると思うか?」

「『個性』が……‼?」

よし、食いついた!そう思った直後、彼の言葉が途切れた。見れば彼の全身から白い

蒸気が上がっている。本当にギリギリだったんだろう。……跳んでいる時に元の姿に戻ったら、どうする気だったんだろう？

急に蒸気を上げるオールマイトに驚く緑谷。本来なら張り切り過ぎて気づかなかったのだろうが、流石にそうはならないか。

そして現れたのは、オールマイトとは似ても似つかない痩身の男性。私にはもう正体も分かっているが、様式美として聞いておこう。

「あなたは……．誰だ？」

すると彼は一瞬沈黙したのちに答える。

「私はオールマイトさ。」

そして溢血した。

ヒーロー

オールマイトが本来の姿に戻った直後、緑谷は町中に響き渡るような奇声を発した。当然だ。小さい頃から憧れていたヒーローが、突然ガイコツのような見た目になったのだから。

「う、嘘だ……」

ショックを隠せず、緑谷がそう漏らす。

「オールマイト、か。驚いたな。なぜそんな姿に……？」

聞くと、オールマイトは一瞬躊躇い、

「いいだろう。見られたついでだが、決してネットに書き込んでくれるな少年少女？」

そう言ってシャツをめくった。見えた傷跡は、その破壊の生々しさを今でも感じさせる物だった。知っていた私でも、思わず眉を顰めるほどだ。

「これは5年前……ある敵（ヴィラン）の襲撃で負った傷だ。呼吸器官半壊、胃袋全摘。」

「度重なる手術と後遺症で憔悴してしまってね。……結果がこの有様だ。」

「そんな……オールマイトが誰に？まさか、毒々チェーンソー？」

「いや、それはないと思うぞ?」

何だその名前はと思ったが、聞いたことがあった。一応全国指名手配されていたが、あれにやられるわけはない。

「……詳しいな。だが、あんなチンピラに負けはしないさ。私が、公表するなと頼んだんだ」

そう。ＡＦＯ。現在の弱体化したオールマイトの拳ですら私は受ける自信はないというのに、全盛期の彼と渡り合った本物の化け物。

「ヒーローは悪に屈してはならない。だから、笑うんだ。人々に希望を与えるために。己の内の恐怖を超えるために。」

これが本物のヒーロー、次代を導く者か。……私との格の違いを見せつけられているようで、恥ずかしいな。

「少年。君は『無個性』だったな。君の努力は体を見ればわかる。だが、あまりに凶悪な『個性』を持った敵(ヴィラン)との戦いは常に命懸けだ。悪いが私には……『個性』がなくともヒーローになれるとは言えないよ。」

そう言ってオールマイトは去っていった。その背中は、あの敵(ヴィラン)を倒した時とは比べよ

うもなく頼りなく見えた。

「……すまない、緑谷。こんなつもりでは……」

いや、私も正直予想外だった。ここにいるのは本来のやせっぽっちの少年ではなく、心身を鍛えた立派な青年なのだ。オールマイトも緑谷がヒーローになることは否定できないと思ったんだが……。やはり、彼が戦った敵(AFO)の、『個性』の恐ろしさを見にしみて味わったからだろうか。

「謝らないで火守さん。確かにオールマイトに諦めろって言われたのはすごく……かなりショックだけど、吹っ切るよ。僕は僕の出来ることをするだけだ！」

「いや、私の気が済まない。……そうだ、何かして欲しいことはあるか？今なら何でも一つ聞こう。」

私程度が慰めにできることもあまりないだろうが、少しでも精神的なダメージを軽減できればと提案してみる。だが、

「えっ？いやいや、いいよ僕気にしてないから！ほら帰ろう！」

と慌てた様子で言われた。……やはりかなり落ち込んでいるようだ。

爆豪　勝己は荒れていた。取り巻き2人があれこれと言ってくることも気にせず、己の中の怒りをさらに激しくしていた。

（クソが……あのデクの野郎が……俺に並ぼうってか⁉？）

緑谷　出久。彼の幼馴染で、いつも自分の後ろをついてきていた『無個性』のナード（ザコ野郎）。強い『個性』を授かった自分にとってはトップヒーローへの道を進む上での石コロぐらいの存在だった。

あの日までは。

（そうだ……あのクソ女……！アイツがあのクソデクに関わり始めてからだ！）

自分と同じ学校に進んだ緑谷に難癖をつけていた時、止めに入った女。何の関わりもないはずの緑谷を庇った奴。自分よりも身長が高く、関わるたびに見下されているような気分になる――実際に常に余裕を持っていたのが気に入らない――が、まあそれは良かった。問題なのが、

（アイツに勝てる、ビジョンが見えねえ！）

最強を目指す彼にとって、その女は常に壁であり続けた。

気に入らないことをした緑谷（デク）を『個性』で脅してやろうとした時、素手で爆発を握り

つぶされた。しかもそのことに何の感情も持たず、ただ「やり過ぎだ」と言って握られた手を離された。まるで自分のことなど眼中に無いかのようなその態度！

「気に入らねえ……」

そう零したのを聞き、２人が語りかける。

「緑谷のこと？いや、あいつのことなんでそんな嫌ってんのさ。」

「そーそー。バッキバキだぜ、アイツ。……火守とずっと一緒なのは見てて腹立つけど！」

「あいつら……俺の前に立ってるつもりなのが気に入らねぇんだよ！特にデク！」

そう言ってペットボトルを蹴り上げる。まだ中身が入っていたのか、鈍い音を立てて転がっていった。

「じゃ……じゃあさ！あの近くのゲーセン寄ろうぜ！」

「そーだな。あそこカモ多いし！」

「だーかーら、そういうのやめろっつったろテメェら！俺の内申に響いたらどうする！」

その言葉に、口には出さずとも同時に（みみっちい……）と思う２人。だが、その視

界に恐ろしいものが映った。

「ば、爆豪……後ろ……」

そして爆豪は呑み込まれ――――

私と緑谷は、吹き上がる爆炎と瓦礫を呆然と見ていた。

オールマイトと別れてからそのままいつもの帰り道に戻っていたら、近くの商店街から煙が上がっているのを見つけたので寄ってみると爆豪があのヘドロ敵（ヴィラン）に呑み込まれていたのだ。いや、それは知っていたことなので構わないが、問題なのは奴が爆発で生じた瓦礫を大量に身に纏っていたことだ。

そのせいで爆発が起きるたびに散弾のように瓦礫が飛び散り、平和だった商店街が紛争地帯のような有様だ。それにしても、いったい何であんな変化が起きたのだろうか。

……私のせいだな。私が緑谷に逃されたことから学習して、遠距離攻撃と盾を手に入れたのか。これは、本当に並のヒーローでは手に負えない。それどころか、緑谷が「知識」のように飛び出していけば強くなった今でさえ負傷、最悪の場合命を落としかねない。

「かっちゃん、そんな！ヒーローたちは……」

「この周辺のヒーローは皆あいつと相性が悪い、あるいは決定力に欠ける奴らばかり

だな……危ない！」

飛んできた瓦礫を手で打ち払う。それにしても今でこそさほど苛烈でなくなったとはいえ、昔は酷い扱いをされていた幼馴染をよく心配できるものだ、と尊敬すらしてしまう。

「緑谷、下がろう。あれに巻き込まれては命が危ない。」

そう言うが、緑谷の足には力が入っている。

「……まさか、彼を救けるつもりか？」

「だって……」

緑谷は、強い感情の籠った目で私を見て、言った。

「かっちゃん、救けを求める顔をしてた‼？」

……素晴らしい。何と素晴らしい。緑谷、君は間違いなく最高のヒーローになれるだろう男だ。だが、だからこそ。

「それでも、助けに行かせない。ここはヒーローの出番だ。それに、君を死なせるわけに

はいかない。」

君を万が一でも失わせない。そう決意を込めて言うが、緑谷はこう返した。

「確かに僕1人なら、あの中に飛び込んでも何もできない。だから、お願い、火守さん！力を貸して！」

そう言われても、はいと頷く訳がない。私は……

あっ。

私は彼の願いを聞かなければならない。なぜなら、私がそう言ったから。

なんとか回避する方法はないかと考えたが、どうしようも無い。くそっ、「危ないことは禁止」なんかの条件はつけておくべきだったろうに。何でもは言いすぎた。ぐしゃぐしゃと頭を掻いて、告げる。

「分かった。そういう約束だったからな。ただ……君が危ないと思ったらすぐに脱出させるからな。」

ちゃんとプランはあるんだろうな？

その敵（ヴィラン）は、全能感に満ちていた。拘束した強力な『個性』を持つ子供。並のヒーロー

では対処できない流動的な体。そしてその身に纏った弾丸。これだけ揃えば、

『奴に報復できる！』

そう確信していたからだ。その全能感のまま商店街で暴れ回ったが、周りのヒーローは手すら出してこない。間違いない。皆俺を恐れてるんだ！高揚した気分でさらに暴れ続ける彼だったが、前から誰か走ってくるのが目に入った。

……ムカつくな。

自分を恐れない存在がいることにそう感じたが、やってくる者の顔を見て彼の苛立ちは頂点に達した。その顔がオールマイトから逃げていた時人質兼隠れミノにしようとした女を逃したガキのものだったからだ。

丁度いい。ここでぶっ殺そう。そう考えて手を広げたところで、そのガキが何か投げるのが見えた。バカな奴、とほくそ笑む。確かに一度は引っ掛かったが、それだけに二度目はないのだ。それに、どう動こうが人質を助けたいなら自分の正面に来るだろう。ならそこを狙い撃ちにしてやる。

そう考え、視界を失ったように見せて大きくよろめきながら両手に瓦礫を集めた。自分をヒーローだと勘違いしたガキを穴だらけにしてやる、と思っていた彼だが。

後ろから看板で殴られることは考えていなかったようだった。

なるほど、やはり面の攻撃には弱いな。大きく体を崩した敵（ヴィラン）を見てそう考えながら、もう一度振り下ろす。一般人にこれをしたら犯罪だろうが、相手は傷つかないのだ。遠慮することはない。

私がしたことはシンプルだ。奴は自分が爆破し、火が燃え盛っている背後に全く気をかけていなかった。なので後ろから忍び寄り、緑谷の動きに合わせて叩いただけ。意識していない攻撃には皆弱い。バックアタックはどこの世界でも有用なのだ。

爆豪と緑谷が離れていったことを確認した時、奴はやっと私に気づいて腕を膨張、振るってくるが避けて腕、そして頭部に連続して看板を叩き込む。

『おおおまぁぁぁえぇぇぇぁ！』

と敵（ヴィラン）が叫びまだ残っていた爆豪の汗を使った爆破を行うが、飛んできた瓦礫と爆炎は手で強引に捌ききった。

一見すると私が圧倒しているように見えるだろうが、そんなことはない。こいつには面の攻撃しか効かず、そのためには結構な大振りが必要だ。つまり、冷静になられれば私に勝ち目はない。もちろん負ける気もないが。

なので。

「ヒーローの皆さん！あとはお願いします！」
と叫び、逃げた。

継承者

私と緑谷はヘドロ敵（ヴィラン）がヒーローたちに袋叩きにされた後、ヒーローたちにみっちり叱られた。緑谷は『無個性』にも関わらず凶悪な敵（ヴィラン）の前に飛び出したことを、私は火に飛び込んだことを。当然だ。あの場に飛び込むことはどう考えても自殺と同義だったのだから。

それに爆豪を引っ張り出せたのも奴が緑谷との因縁を優先したからで、ヒーローからすれば「人質に何かあったらどうするのか」という考えがあったのだろう。

だが結果的には物的被害はあれど誰も負傷せずに済んだ。なので、説教も「君たちが動く必要は全くなかったんだ」と締め括られた。

今度こそ家路をたどりながら、緑谷に聞いた。

「爆豪を救けたこと……ヒーローにかなり言われたが、後悔していないか？」

「うん、してないよ。多分同じことが後１００回あっても、また救けてたと思う。」

「そう言っても……私がいなければどうなっていたかわからないんだぞ？」

「はは、そうだね。……もっと強くならないと。」

緑谷は自分ができることとできないことを理解して、その上であの場に飛び込んだ。限界を超える（Plus Ultra）、それがヒーローのあるべき姿。私にはできなかったことだ。

君はヒーローになれる、改めてそう思わされる。

そして翌日。いつものように道場に行くか、と考えていると、緑谷が「人がいないところで話したいことがあるんだ」と囁いてきた。なるほど、オールマイトからＯＦＡを受け継いだのを「この歳で『個性』が発現した」と伝えるためか？本来なら受け継ぐのは入試の日ギリギリだっただろうが、身体は私が鍛えただけあって十分できている。

……これからは、オールマイトから色々学んでいくといい。笑顔で送り出すのが私にできる最後のことだろう。

わかった、と伝えて緑谷と連れ立ったのは、私の家。母は災害救助の講演などで家を開けているのだ。それでも必ず夕食までに帰ってきてくれるが。つまり、学校が終わっ

てすぐのこの時間ならば誰にも聞かれることなく話ができる。
お茶と適当な菓子を緑谷に出して話すよう促すと、お茶をくっと飲んでから話しはじめた。

……なるほど、昨日私と別れた後オールマイトが来て謝られたと。『無個性』の君が飛び出したことに感銘を受けた、君はヒーローに相応しいと言われたんだと嬉しそうに語っている。
それはそうだ。幼い頃からの憧れの人物にそう言われたのだから。努力の甲斐があったな、というと笑っていた。
まだ続きはあるらしい。えー、その時にオールマイトの後継者になるよう言われて？後継と言っても歌舞伎役者の襲名のような話ではない。彼の『個性』、いや彼が先代から、そしてその前から受け継いできた『個性』の、次の継承者になるよう言われた……ちょっと待て。

「緑谷？何を言ってるんだいきなり⊠それはどう考えても私に話していいことじゃないだろう！」
危ない、なまじ知識があったものだから流しかけた。だが……え？それを私に言った

のか？なぜ？オールマイトの秘中の秘、どこかから漏れれば社会が揺らぐような話だぞ！そう思って内心で慌てる私だが、緑谷は冷静に答えた。

「うん、それでね。その話なんだけど、ちょっと待って欲しいって言ったんだ。もっと相応しい人がいるって。それで……僕がオールマイトの後継者に相応しいと思うのは火守さんなんだ。」

何を言ってるんだ。私は元々死にたくないから鍛えただけの、言うなれば意思の伴わない力を持っただけの人間だぞ？緑谷を鍛えたのだって、正義感ではなく哀れみとかそういった感情が原因だ。そんな私が、巨悪（AFO）と対峙する、その意思を受け継いできた流れの中に加わるなんてあり得ないだろう☒

「……待ってくれ、緑谷。話が大きすぎてついていけていないし、混乱している。仮にこの話が真実だったとしても、それなら尚更私にその役は相応しくないと思う。私には彼のような正義への義務感などないんだから。」

「いや、この話は本当なんだ。それに、オールマイトの力なら『無個性』の僕よりも、元々力のある火守さんが受け継いだ方が良いと思って。」

あくまで個人的な意見ではあるが、力がない者に与えられた力と、元々持っている者

に与えられる力ならば前者の方が価値があると思うのだ。これは持っている側の傲慢さかもしれないが、緑谷には力を得る機会があるならそうして欲しいと思う。

「オールマイトは緑谷、君を認めたんだろう？ならば君がなるべきだ。……そもそも、私は彼に認められていないわけだし。それに、君はヒーローになるんだから『個性』があるに越したことはないと思う。」

「わかってるよ。……でも、火守さんは僕のヒーローだから。」

どうやら緑谷に期待を抱かれすぎているようできまりが悪い。私は本当にそんな大した人間じゃないんだがなぁ……。

「言っておくが、私はその話は絶対に請けないぞ。君の権利を奪うほど落ちぶれてはいないんだ。」

「そ、そんな……」

目に見えて落ち込む緑谷だが、どうしようも無い。私は１００年にも及ぶ因縁に関わりたくないし、まして命の危険があるならばまっぴらごめんだ。私の力は元々、死なないために培ってきたのだから。

それから一時間ほど話し合い……というか意見の押し付け合いが続いたが、お互い引かなかった。「継がせたい」と「お前が継げ」というシンプルな結論が両者にあるため、

どうしようもなかったのだ。どうしたものか、と考え込み……思いついた。

「緑谷、オールマイトと連絡は取れるのか？」

「え、うん……一応、教えてもらったけど。どうして？」

「私たちがここで話し込んでいても、互いの意見は平行線だ。そこで……どうだろう。結局は現在の「力」の所有者であるオールマイトに改めて判断してもらうのは。そこで完全に決着にすればいいんじゃないか？」

「な、なるほど……じゃあ呼ぶよ、今！」

「今？……まあいいか、うちはあと数時間誰もいないから。」

この件に関してはできる限り早く結論を出したほうがいい。早くＯＦＡに馴染むほど、その習得が容易になるのだから。それに、明日は土日だし。

緑谷が電話をかけてからわずか十数分、ピンポーン、とチャイムがなった。念のため覗き窓から見ると金髪の、長身だがかなり痩躯の男性が見えた。間違いない、オールマイトだ。

ドアを開けると、彼が驚いた顔をしていた。それはそうだな、緑谷がいると思ったら女が出てきたのだから。

「き、君は昨日の？なぜここに。」
「なぜも何も、ここは私の家だからな。あ、入ってくれ。お茶を出そう。」
「ど、どうも……」
玄関先で話していてもしょうがないので席につくよう勧める。私に対して少し気まずげだが、何も気にしていないのに。お茶を用意して私も座ってから、いきなり切り出した。
「緑谷があなたを呼んだのは、ＯＦＡについて相談があるからなんだ。」
「なるほど、それは問題……だ、な……？」
お茶を啜りながら聞いていて私と同じように流しかけたようだが、流石に気づいたらしい。あまりに重要なことをさらっと言われると、その瞬間は気づかないものなのだ。
その後の彼の反応は迅速だった。瞬きする間にマッスルフォームになったと思うと横並びだった私たちの肩を持つと、
「詳しく……話してもらおう。」
そう、珍しくジョークの欠片も含まない声色で言った。

「なるほど、昨日少年が言っていた”相応しい人”というのは君のことだったか……。しかし、緑谷少年！」

オールマイトはそういうと、緑谷に指をビシッと向けた。

「私は曲がりなりにも、君ならそう言いふらすこともないだろうと踏んでいたんだ。だが……少々迂闊だったかな？」

「すみません、オールマイト。信頼を裏切ってしまって。でも、どうしても火守さんには言わなきゃ、火守さんの方がふさわしいと思って……。母さんにも言ってないけど、伝えなきゃと思って。」

そう聞くとオールマイトは全身から煙を出して痩せ細った姿に戻り、ふむ、と顎に手を当て考え込んだ。

「少女、君と緑谷少年との関係は？」

「関係か……。中学に入った時に緑谷が幼馴染に絡まれていてな。それを助けたついでに『無個性』だということを知って、『個性』なしでの戦い方を教えていた。まあ、師匠みたいなものだ。」

「ふむ……緑谷少年にとっては、親の次に信頼できる人物というわけか。」

「それに、すごく強いから……僕よりも、オールマイトの力を継ぐべきだと思って。」

緑谷がそう補足した。だが、
「君の想いは伝わった。その上で……答えはＮｏだ。私の『個性』を引き継げるのは、緑谷少年だけ。」
オールマイトはそう返す。
「ほらな、緑谷。君が受け継ぐべきだと言っただろう？」
しかし諦め切れないのか、さらに続けた。
「……どうして火守さんじゃだめなんですか、オールマイト。僕よりもっとすごいのに。」
「理由は二つ。まず一つ。私は彼女を知らない。君の師匠だというならその人柄は信頼できるが、私が惚れ込んだ君のヒーロー性があるかわからないこと。そして二つ。渡せないんだ。」
「渡せない？」
思わず聞き返した。私にヒーロー性がないというのは正しいが、渡せないとは初耳だ。どういうことだろうか。
「私の『個性』、ＯＦＡはその継承者が代々培ってきた極まった力の結晶。そしてその力は拳の一振りで天候を変えるほどに極まった。だから……『個性』を有する人間ではその力を受け取り切れない。」

「受け取り切れないと、どうなるんだ？」
「私は約４０年この力を保持してきた。その過程で、歴代の継承者についても調べている。そしてその死因についても。ある代の継承者は……老衰で死んでいたんだ。４０歳で！」
「よ、４０歳で老衰？」
緑谷が驚くが、そう言われて察しがついた。なるほど。内包するエネルギーが膨大なものになりすぎて、体に負担がかかるのか。うん？
「ちょっと待て。それなら、その力は『無個性』しか継げないということか？」
「その通り。だから、その精神を見込んで緑谷少年を……」
「なら、この力は緑谷に渡したが最後誰にも継げないんじゃないか？この総『個性』社会では無個性の子供の方が珍しいだろう？」
そう言うとオールマイトは一瞬唾を飲み、「その通りだ」と答えた。
「つまり、その力の集積とやらはもう行えないと？」
その問いにも、オールマイトは同じ言葉を返す。
「……気が変わった。オールマイト、頼む。私にその『個性』を継がせてくれ。」
そう言うとオールマイトは、一瞬呆けてから捲し立てた。

「だっ……さっきの説明を聞いていなかったのかい⊠『個性』を持つものに私の力は耐えられないと……」

「理解している。その上で言っているんだ。つまり、緑谷の前にもう1人継承者がいれば、緑谷が受け継ぐ力はより強大になるんだろう?」

「ああ、その通り、だが……」

「その役目を私にやらせてくれ。……実は私の『個性』は特殊でな。試しに「全力」の20……いや、15%くらいを私に打ち込んでくれ。」

そう言ってオールマイトに手を伸ばすが、当然のように断られる。仕方ないのでデコピンでいい、と粘り打ってもらうことにした。

それでもオールマイトは躊躇っていたが打たせる。すると、

「むうっ、これは……」

そう唸り、徐々に込める力が増していく。最終的に15%の拳を撃ち込まれたが、それすらも片手で簡単に受け止めてしまった。

……嘘だ。手がジンジンと痺れている。力を流さずに『個性』頼りで受け止めたとはいえ初めての経験だ。これを30%にせずによかったな、と息を吐いた。そして何も感じなかったかのように振る舞う。

「……この通り、私はエネルギーを吸収することができる。それと並行して肉体の強化も行えるから、あなたの『個性』の力も受け切れる算段はある。それができれば、私の力を上乗せして緑谷に譲渡できないか？」

オールマイトは、今までにないほど険しい顔をした。

火守　橋華（ひもり　きょうか）

オールマイトの髪を食べてそろそろ3時間くらいになるだろうか。正直に言えば力も何も感じないので不安ではあるが。寝転がっているが、体に不調も何もない。ひょっとして彼に譲渡を認められなかったのではないか、と疑ってしまう。……それならそれで、緑谷が正式な後継者になるんだから私にとってはメリットもあるが。

隣にいる緑谷に話しかける。

「オールマイト……やっぱり、私に譲渡することを認めていないんじゃないか？」

緑谷がいるのは、私に万が一があった時ＯＦＡを失わせないための保険。私がオールマイトに頼み込んだのだ。私の『個性』ならば耐えられるとは判断しての試みではあるが、そうでない場合緑谷に受け継いでもらえば難を逃れられるから。

「いや、オールマイトは一度言ったことを翻すような人じゃないと思うよ……多分。」

だと良いがな、と息を吐く。わざわざ母に「友人の家に泊まる」と嘘をついて――――いや嘘ではないのだが、他人に見られることがない場所にやってきたのだ。オールマイ

トが手配してくれたとはいえ、成果が出るに越したことはない。
「あの、火守さん？」
緑谷が呟いた。
「なんだ？」
「ＯＦＡを受け継いで欲しいって話。ずっと嫌がってたのに……なんで、受け入れてくれたの？」
……それを聞くか。いや、聞かれるだろうなとは思っていたが、できれば言いたくなかったんだが。
「オールマイトの怪我、覚えているか？」
「うん、あの脇腹の……」
「あれをしたやつがオールマイトの、いやＯＦＡの継承者の宿敵だと考えたからだ。」
「えっ？」
「そうだろう？あのオールマイトにあれだけの深手を負わせた敵（ヴィラン）なんて聞いたこともない。そして……宿敵ということは、その力が己に並ぶ、もしくは超える存在だったんだろう。結果として退治できたか逃げられたか……。まあ、彼が緑谷を後継と見込んだことを考えれば察しはつくが。」
これはでまかせだ。実際は知識から語っているだけにすぎない。もっとも、それだけ

ならばオールマイトの力を緑谷がそのまま受け継げば良いと考えていた。そう。次に期待できるなら。

「だが、緑谷は次に受け継ぐことなく決着をつけなければならない。なぜなら、その力はもう誰かに受け渡せないから。」

そう。緑谷は巨悪（AFO）、あるいはその後継を退治するまで戦い続けなければならない。誰かにその役目を譲ることも許されず、どちらかが途絶えるまで戦う。それは……あんまりじゃないか。

「ならば受け継ぐ力を、少しでも大きなものにして渡してやりたい。そう思ったからだ。……一応その、なんだ、師匠面をしていたわけだし。」

私には、先人から託された力と責務を全うするような度胸もないし正義感もない。だが……一人の友人が受け継ごうとする灯火を守り、育んでやりたいと思うくらいの人間性はあるのだ。

最初に感じたのは体の奥底から感じる熱。ついに変化が起きたか、と喜んだが、それが間違いだったことにすぐ気付かされた。

「ぐ？が、ぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

痛い痛い痛い痛い！我慢できず声を上げてしまう。

この肉体に傷がついたことなど数えるほどだし、そのどれもが重篤なものでなかったため私は痛みへの耐性は低いと自覚している。それでも……過剰すぎると思える激痛が全身に走った。

体を巡る血液の頭にはじまり爪先まで、内圧で弾けてしまいそうなイメージが頭に浮かぶ。なるほど、これがＯＦＡ、幾代もの力の結晶か。

思わず床に爪をたてるが、気休めにもならない。『個性』を全力で使い、溢れ出しそうなエネルギーを吸収して全身を強化するが明らかに追いついていない。

さ、裂ける……！

思わずそう考えてしまうほどの苦しみ。全身を捩り、吠え、胸を掻きむしるが全く収まらない。内側で膨れ上がった力は膨張し続け、吸収限界を超え、結合さえも引きちぎり――

プシッ

小さい音が、私の体から出た。真っ赤になった視界には、凍りついたような表情の緑

谷。どうしたんだろう、と思っていると、腕が裂け血が吹き出していた。

……ああ、まずいな。慌てて押さえて結合を強化、強引に繋ぎ止めるが同じ音が脚からも鳴った。

そこから先は終わりの見えないモグラ叩きだった。エネルギーは溢れるほど、それこそ私の体を引き裂くほどあるので修復に困ることはなかったが、それでも追いつかない程の速度で全身が裂けている。手を治した瞬間に首筋、そこを塞ぐと脇腹が、といった具合に。そして……亀裂は、徐々に大きくなってきつつあった。

後で緑谷から聞いたことだが、この時の私はまあひどいことになっていたようだった。喉が枯れる程の叫び声を上げながら手足は激しく痙攣。全身の裂け目からは筋肉も見え、身体中、眼からも血涙を流していたそうだ。……よく死ななかったものだと思う。

体の裂け目から吹き出した量が明らかに多く、血が足りていないので「体喰」で全身にエネルギーを送りながら強化、吸収も同時並行で行なっている。痛みで意識が飛べば死ぬな、とぼんやり考えた。

死をも厭わず戦い続けた力は、死ぬ覚悟も、命をかけるべき目的も持たない私が持つには大きすぎたのか。そう思うと、体に感じる圧力が一気に増した。痛みと熱が駆け巡っているはずなのに、首から下が妙に寒い。日和ったせいで押し負けている気がする。これは……限界だろうか。そう思った時だった。

温かい。

全身を焼き尽くしそうなＯＦＡの熱とは違う、頼りない、でも温かい熱を右手に感じる。そうか、緑谷か。「がんばれ」と言っているのか、これは？

……なぜヒーローが強くあれるのか、分かった気がする。この熱を、誰かからの応援を、力に変えて限界を越えることができるからだ。

私も、ちょっと限界を超えてやろうか。

全身くまなく強化しようとするからだめだったんだ。裂けた部位を集中的に強化。破壊と修復を何度も繰り返したおかげかエネルギーの通りが格段に良くなったそこをハブと置いて、吸収を進める。強化の仕方も硬くするだけではなく柔軟に、だが強く。爆発しようとする力を抑え込みながら拡げて。

血を流しながら叫ぶ。自分を奮い立たせるために、諦めないために。

全身に走った亀裂から、力が漏れるのを感じた。それを結び、繋ぎ、圧縮する。

視界が白い光に満たされた。薄い膜に包まれたように、音が聞こえなくなる。全身が

溶けるような感覚。

耐えて、耐えて、耐えて、そして。

緑谷出久は、その時、ただ呆然としていた。彼の、師であり学友でありヒーローであり憧れである……とにかく大事な女性が、一際大きな絶叫の後ピクリとも動かなくなったからだ。

彼女の様相は、何も知らない者が見れば目を背けたくなるようなものだった。全身……力強さと美しさを感じさせた顔すらも血濡れになっている上、暗赤色の亀裂が首筋や手足、胴体にも走っている。普段は美しく括られている髪は血を吸って重く垂れ、花が散る様を連想させた。

慌てて意識の有無と呼吸、脈の確認を行う――ヒーローは戦闘だけでなく災害救助なども行うので、基礎的な救命措置を学ぶことはヒーロー科を受験する上で必須なのだ――が、当然のようにどれも無い。心臓マッサージをすぐに始めながら、オールマイトに連絡を入れた。向こうでドタバタと音が聞こえたが気にする余裕もなかった。

……僕のせいだ。僕がオールマイトから認められたことに尻込みして、火守さんの方

が向いているなんて言わなければ。

”原作”ならば、彼は今に至るまで無力であり、オールマイトに力を与えられるというチャンスに縋った。だが、今の彼はただの『個性』持ちなら取り押さえられる技を、肉体を彼女によって与えられた。そのため、考えてしまったのだ。自分は彼の力を受け取るべきなのか、と。その結果彼女に無理を強いることになるとは予想していなかったが。

そんな後悔も出している暇はないと、彼は自分のするべきことを続ける。普段なら長い睫毛、ずっと通る鼻筋、艶のある唇に目をやってしまい女性に免疫のない緑谷は顔を近づけることもできなかっただろう。だが今は急を要する状況であり、人を救けるのを躊躇わない彼は迷わず彼女に口を重ね、息を吹き込もうとする。

だが、彼は気付かなかった。彼女の全身に走る暗赤色の亀裂に、光が灯ったことに。そしてその光が、徐々に広がっていることに。